マブラヴ暴走機械

ゴンザレス＝アキヒロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
マブラヴ暴走機械

【Ｎコード】
Ｎ１３４２Ｚ

【作者名】
ゴンザレス＝アキヒロ

【あらすじ】
叔父が開発したＶＲＲゲームの実験に参加した船頭　海は、一人夏休みをゲーム三昧で過ごす予定だった。
しかし、実験は失敗。
カイの肉体は現実世界では死亡してしまう。

そして、自分の体が死んでいることに気づかないカイは、そのままゲームを進めていく。

しかし、その世界の人間はとてもゲームとは思えず、敵も生々しい。

果たしてそこは現実なのか、異世界なのか、ゲームの世界なのだろうか。

降り立ち、世界は変わり始める（前書き）

移動しました、すみませんm（＿＿）m
ゴンザレスと言います、見ていただけたら、嬉しいです。

降り立ち、世界は変わり始める

少年が目を開けるとそこには、荒野が広がっていた。

「うむっ、流石オジキの創った世界だ！
リアルと何ら変わりないなっ！」

そこで少年は、感心したように声を上げる。

少年の叔父である、船頭　拓也　が創ったゲームの初実験に参加した、船頭　海　は、初めて見たゲームの世界に感激していた。

「……よし、早速ゲームを開始しよう」

カイはそう言うと腕に装着された、機械のような物を操作する。

機械の操作方法は、予め叔父から説明されていたので、迷う事はない。

操作が終わると、少年の目の前に半透明の画面が出現した。

船頭　海

初期ポイント　１００００
現在　技術力Ｌｖ１

「開発可能なのは、何があるかな？」

カイが更に目の前に現れた機械を操作する。

ザク１

必要技術力１

開発必要ポイント　２０００

生産必要ポイント　５００

ザク２

必要技術力　３

開発必要ポイント　３０００

生産必要ポイント　６００

カイはそこまで見ると、画面を見るのを一旦止め、顎に手を当てて考え始めた。

（確かポイントは、敵を倒せば手に入る。
そして、技術力は色々開発させれば上がるんだよな
それなら、まず旧ザクを開発、生産してその後ポイント稼ぎをしようかな）

とりあえずカイは、色々と開発できる物を開発していき、その後ポイントを溜める事に決めた。

ここはゲームの世界、装備を整え、レベルをコツコツ上げていく事が肝心だ。

カイは開発可能な物の欄を見て、先ずは旧ザクの開発を開始させた。

すると、画面には

『旧ザクの開発を開始します、開発完了まで残り０時間１０分００秒』

という画面に変わる。

（開発には時間が掛かるのか、結構凝ってるな）

カイはそう思うと、人工食料開発Ｌｖ１、ＣＰＵ開発Ｌｖ１を選択し、その後岩に腰かけた。

ＣＰＵとは、自分が操作するＭＳ（モビルスーツ）以外を自動操縦してくれる、装置だ。

その他にもアンドロイド開発Ｌｖ１や、ＭＳ次元収納庫Ｌｖ１等もあったのだが、技術力とポイントの関係でカイは諦めるしかなかった。

（確か開発しても、生産しなければ意味がなかったんだよな。残りはＣＰＵが３０００必要で食料が５００、旧ザクが３０００必要だったから、のこり３５００ポイントしかないか。）

その後カイは、武器開発Ｌｖと修理技術開発Ｌｖ１を発見し、ポイントを使った為、残り１５００しかポイントを残せなかった。

「よし、旧ザクの開発が完了したか。
生産開始、そして、武器の生産も」

するとカイの目の前に、光の粒子が集まり、旧ザクが出現。

そして、次にヒートホークとザクマシンガン、クラッカーも、旧ザクに装備された状態で出現する。

最も、ヒートホークはザク？用であり、ザクマシンガンも１０５ｍｍの物だ。

そして、これでポイントは残り８５０になってしまったカイは、本格的に敵を狩に行かなければならない。

カイは浮かれた気持ちで、旧ザクに搭乗する。

カイは旧ザクに乗ると、機体を稼働させた。

旧ザクのモノアイが光、旧ザクはカイの操作によって歩き始める。

（流石に本物と違って、操作は簡単にしてあるみたいだな。
転ぶ事もなかったし）

カイはそう思うと、荒野の中をザクに走らせた。

「お、敵発見」

しばらくザクを走らせていると、カイはレーダーに赤い点が映るのを見た。

赤い点の数は１０ほど、序盤にしては多いとカイは感じたが、早く戦いたかった為、カイはその方向にザクを走らせた。

「いた！……随分気持ち悪い外見の敵だな」

カイはザクのモノアイから送られてくる映像で敵を確認し、そう感想を洩らした。

しかも、レーダーに移った赤い点は、どうやら重なっていたようだ。

モノアイから見た敵は、数えられないほど、うじゃうじゃ蠢いている。

二本の白い腕に長い首を持ち、多足の生物で、カイは敵の見て何故

か嫌悪感が沸いてくるように感じた。

敵ももう既にカイの存在には気づいているようだ。

凄まじい勢いで、カイの旧ザクに突撃してくる。

カイは３つのクラッカーを敵に投げつけ、スラスターで後ろに後退する。

クラッカーは地面に落ちると爆発し、大量の敵を爆死させていく。

（敵の体液が飛び散るって、これは明らかにＲ１８設定だろ！）

カイはそう思いながらザクマシンガンを連射、ほぼ全ての敵を撃ち殺し、クラッカーを投げて残りを片付けた。

そして、カイは画面を出現させ、ポイントを確認する。

（おっ、２８１０ポイントになってる。
敵は５０体くらい居たから一体につき４０ポイントくらいか）

カイはそう思うと、１０ポイントを消費して食料生産を発動し、食

料と水を出現させると、カロリーメイトのような物を食べる。

（不味い、食料開発のレベルも上げないといけないみたいだな）

カイはその後、更に２０００ポイント近く消費し、旧ザクとＣＰＵ、武器のセットを出現させた。

（これで僚機の出来上がりか。
これから暫くは、敵を狩ってポイントを稼いでいこう。）

カイはそう思うと、僚機と共に索敵を開始した。

ひたすら、無限に沸いてくるように思える敵を狩り、無理ならばスラスターでカイ達は撤退していく。

ＣＰＵには簡単な命令しかできないようだが、撤退くらいならば命令できるようだ。

カイは戦っている内に、二機ではきついと気づき、ポイントが入り次第どんどんＣＰＵと旧ザク、武器のセットを作っていった。

そして、ＭＳ部隊が２０機程になると、カイは後方に下がり、ＣＰＵのＭＳに戦わせながら、ポイントを使って開発させ始めた。

既に技術力はＬｖ２に上がっていたので、ザク?開発には残り１レベル必要だ。

旧ザク達の弾薬補給や修復を、ポイントを消費して済ませたカイは片っ端から可能な開発を進めていく。

途中物凄い勢いで突撃してくる、違う種類に見える敵がいたが、スラスターで勢員空中に回避し、後ろからザクマシンガンを撃って仕留めた。

その敵は、巨大だった為か１体につき１００ポイント貰える。

かなりの高度のようだが、ザクマシンガンの集中放火なら、正面からでも倒せるようだ。

武器補修技術開発や、ＭＳ強化技術開発を発動させながら、突撃してくる敵を倒させていく内に、カイは漸く技術力が上がったのを確認した。

これで、ザク?の開発が可能になる。

カイは早速ザク？の開発を開始させ、今回は一旦撤退する事に決めた。

降り立ち、世界は変わり始める（後書き）

閲覧ありがとうございましたm（__）m

開発は始まり、鉄の巨人は目覚める（前書き）

よろしくお願いします

開発は始まり、鉄の巨人は目覚める

撤退したカイは、建造物開発Ｌｖ１をポイントを使ってＬｖ２に上昇させ、拠点を設置した。

見張りは八時間稼働可能な、ＣＰＵに交替制で４体ずつさせることにして、カイは眠る事にした。

次の日、カイは目覚めると日用品生産Ｌｖ１で生産した服を着て、食料生産Ｌｖ２で生産した食料を食べる。

その後歯を磨きながらカイは、ぼんやりとこれからの予定を考える。

（今は夏休みだし、ゲームの中では時間が現実よりも十倍遅く進んでるんだよな。
ゲームに飽きるまでは、暫くこの世界にいても問題ないだろう。）

カイは現実では、栄養剤を一日三食注射されると聞いていたので、１ヶ月くらいは遊べるだろうと考えていた。

それ以上になると、現実に戻った後のリハビリが面倒なので、よほ

どゲームにのめり込まなければ大丈夫だと、カイは考える。

「とりあえず、ザク？の御披露目だな。」

カイは丸いドームのような形をした建物から出ると、ザク？を生産する。

「……おぉ！これこそザクだっ！」

見た目は旧ザクと同じく緑色だが、多少ゴツくなったその姿はまさしく有名な量産型のザクだった。

カイは武器生産能力Ｌｖ２で生産した、１２０ｍｍザクマシンガンとヒートホーク、クラッカーを装備させると、ザクに搭乗した。

「ふふ、これこそＭＳだ。……ザク？を否定する訳ではないが」

カイはそう言うと、早速旧ザク２０機を引き連れて、拠点から出撃した。

唸るザクマシンガンが、発見した敵を直ぐ様挽き肉に変えていく。

挽き肉とはいっても、口を近づけるのすら嫌悪するような物質だが。

途中凄まじい数の敵を見つけた時は、流石にクラッカーを投げつけながら撤退したカイだったが、僚機が脱落する事は一度もなく、逆にザク？をカイは２機更に生産させていた。

（数は多いが敵は強くないな、敵の装甲は結構硬いみたいだが、１２０ｍｍと１０５ｍｍザクマシンガンの集中砲火なら沈められるレベルだ）

結局その日は、カイ達はひたすら敵を狩り続け、技術力を上げる為にカイはどんどん開発にポイントをつぎ込みながら、ＭＳを少しずつ増やしていった。

「ようやく技術力Ｌｖ４になったか、なかなか上がりにくいみたいだな」

カイはそう言うと、僚機の弾丸を生産し、補給させていく。

そして、この日は特に目新しい敵が出現する事はなく、カイは拠点に帰還した。

そして、次の日もカイは同じように出撃した。

作業ゲーではないかとカイは思い始めていたが、開発できる物はなかなか多岐に渡っていて面白い。

当面のカイの目標は、技術力Ｌｖを５に上昇させ、新ＭＳを開発する事だ。

ザク？　２０機と、ザク？　７機で構成された部隊は、今日も敵を作業のように殺害していく。

「数は力らしいが……それは、同じレベルの時に限るらしいな」

カイはそう言うと、欠伸をする。

「ん？何が近づいている」

カイの見るレーダーに、不意に凄まじい勢いで迫る黄色い点が映った。

そして、次の瞬間旧ザクに光線が飛来し、旧ザクを大破させた。

「な！？何処から撃ってるんだ！
レーダーには、何も映っていないぞ！？」

カイはそう叫ぶと辺りを見回すが、敵の死骸しか辺りには存在しない。

しかも、そうしている間に、光線は再度カイの部隊に向かって飛来し、二機目の旧ザクに命中した。

旧ザクの残骸が粒子となって消えていくのを見ると、カイは僚機に撤退命令を出す。

各機はスラスターを全開まで噴出し、拠点に向かって猛スピードで帰還していく。

しかし、それでも敵は無慈悲に、三発目の光線を放ってきた。

カイの近くにいたザク？は回避行動を取ろうとしたが間に合わず、光線はザク？に当たり、ザク？を大破させた。

しかし、ザク？はギリギリ耐えたようで、爆発する事も粒子になって消える事もない。

カイは近くの僚機に、ザク？に大破したザク？を運ばせる。

そして、更にカイは旧ザクを一機失う事になったが、何とか光線の範囲外から抜け出す事ができた。

「敵の攻撃はジムのレーザースプレーガンくらいのレベルか。
ガンダムクラスでなくて、まだ良かったな
まぁ、ある程度ゲームバランスは整えられているということか」

カイはそう言うと、拠点開発にポイントを投入する。

元々拠点は防御力が高いようだが、レーザーには一発ほどしか耐えられそうにない。

カイは拠点のレベルを一気にＬｖ４に上げ、一息ついた。

（超遠距離攻撃が可能な敵か。
ザク？でも大破するレベルだから、早急に対策を練らないと不味いな。
光線を撃つ敵が大量にいたら、即ゲームオーバーだ）

カイはそう思うと、ＭＳ改造Ｌｖに目をつけ、ＭＳ改造のにポイントを振っていった。

（これのレベルをあげれば、ＭＳの強化をポイントとレベル次第だが、行えるみたいだな）

カイは早速自らのザクを強化させていく、まずザクの頭にブレードアンテナを付け、色を赤色に着色させる。

これにはほとんどポイントを必要としなかった。

しかし、次の対レーザー用コーティングＬｖ４は、一体につき１０００ポイントを必要するようだ。

カイは迷わず自らのザクに付加させた後、暫く迷う。

（まだポイントには余裕があるが、一体につき１０００ポイントは高いな）

カイはそう感じて、現在いるザク八機にだけ対レーザーコーティングを付加させる事に決めた。

そして、その後幾つか開発を進めていき、カイは就寝した。

そして、次の日もカイは出撃し、敵を駆逐していく。

数時間の間狩り続けたが、レーザーが飛来することはなく、カイはこの日は早めに切り上げることにした。

（技術力がなかなか上がらん、だがもう少しで上がりそうな気がするな）

カイはそう思い、次の日に備えた。

そして、カイは次の日も敵の討伐の為に拠点を出発した。

敵を狩ること三時間、カイ達部隊に向かって遂にレーザーが飛来し、カイは奴が来たことを察知した。

カイ達は直ぐ様突撃してくる敵にクラッカーを投げつけ、スラスターの推進力を駆使して、閃光が飛来してくる方向に向かって突き進んでいく。

途中運良くレーザーを回避できる事もあったが、旧ザクは命中すれば一撃でやられていく。

（今のところザク？に三発命中し、同じザク？には二発命中したが、耐えられている。
どうやら、対レーザーコーティングＬｖ４は有効みたいだな。）

カイがそう感じていると、何故か途中で飛来してくるレーザーの数が増えていった。

どうやら敵は複数いるらしい。

カイのザクのレーダーに遂に、敵を示す複数の赤い点が映った。

「よし、行ける！」

次の瞬間ザク？に光線が命中し、ザク？が大破する。

どうやらレーザーに耐えられるのは、五発が限界らしい。

カイは７０００ポイントを消費し、ザク？全てに耐レーザーコーティングを塗り直させると、目の前にいる眼鏡をかけたような気持ち悪い生き物と、ずんぐりした生き物にザクマシンガンを連射させていく。

十体程いた新しい生き物は、ザクマシンガンの弾に当たり、あっさ

り爆散していく。

どうやら敵は、防御力は大した事はないようだ。

その後、回りに護衛のように着いていた敵も片付け、カイは達成感に満たされる。

（光線を撃つ敵は、一体につき１５００と１０００か。
周りにいた敵のお蔭で、赤字にはならなかったが、効率は悪いな）

カイはそう思うと、拠点に帰還した。

カイは拠点に向かったのだが、そこには文字通り何もなくなっていた。

どうやら耐久力以上のダメージを受け、粒子になって消えたらしい。

そこには変わりに、敵が蠢いていた。

「ちっ、魔物の分際で俺の住処に手を出すとはな。

報いを受けろ！」

カイの言葉と共にザク達は発砲を開始し、魔物達を殲滅していく。

「これは拠点に護衛を置くべきだったな。
迂闊だった」

カイはそう言うと、他の場所に拠点を設置し直すことに決めた。

（ＭＳも残り自機も合わせて七機しかないから、早急に部隊を建て直す必要がある）

カイは一先ず拠点を造り直し、ＭＳ部隊を建て直す事を決めた。

開発は始まり、鉄の巨人は目覚める（後書き）

閲覧ありがとうございましたm（__）m

脅威の陸上型ＭＳ（前書き）

よろしくお願いします。

脅威の陸上型ＭＳ

カイは拠点となる場所を探して、スラスターで飛行している途中に、街のような場所を発見した。

街とはいっても人気は全くなく、廃墟のような街並みが広がっているだけだったが。

（そういえば荒野辺りしか策敵してなかったが、確か宇宙から来た侵略者を倒すとかいう設定だったから、人間がいてもおかしくないんだよな）

カイはそう思うと、辺りをザクのモノアイ越しに見回すが、やはり人間の姿は一人も見当たらなかった。

「……一先ずこの辺りには拠点を設置するか。」

カイはそう言うと、廃墟から少し離れた地点にＬｖ４の拠点を設置した。

その後カイは自らの赤いザクを眺めて、暫くの間考える。

（このザクは確かに塗装しコーティングはしたが、それ以外はただのザクだ。
しかも、俺の操作技術はあの赤い彗星には遠く及ばない。
それなのに、大佐と全く同じ外見にするのは、もしかしたら大佐に失礼なのではないだろうか。）

カイはそう思い始め、自らのザクに黒い模様を施す事にした。

その後更にカイはザクを改造し、機動性を強化させる。

強化はＬｖ４のためか、機動力は１，４倍になった。

（後１０％低ければ……いや、気にする必要はない）

カイはその後、何気なく武器開発をＬｖ３に上昇させた。

武器開発は、この技術力ではこのレベルが限界のようだ。

そして、３０分が経過し、武器開発が完了すると同時に、カイの技術力がとうとうＬｖ５に上昇した。

「よし、此でついにドムが生産できる！」

カイはそう言うと、ドムの開発を開始させた。

ドムの開発には１５０００ポイント必要な上に、開発時間一日掛かるようだが、仕方がない事だろう。

開発には大量のポイントが必要だが、量産型ならば生産にはそれほどポイントはかからない。

しかもドムは、ザクとは違い元々陸戦型の機体だ。

この地球では、多いに活躍してくれるだろう。

ザクでは地上で俊敏な動きをするのには、改造する必要があるが、地上用に開発されたドムならばホバー移動が可能で、俊敏な動きができる。

更に武器開発Ｌｖ３になり、増えた武装の中にヒートサーベルが存在した。

これをザクにも装備させれば、近距離戦闘も有利に進められるようになるだろう。

（後は、自機をどうするかだが……せっかくザクの操作に慣れたのに、武装の違うドムに変えるのもな）

カイはそう思うと、自機を更に改造していく事に決めた。

脚部を改造して、ホバー移動を可能にし、スラスターの強化、装甲の強化をしていく。

本来なら無茶苦茶な改造なのだが、ゲーム故に可能になってしまう。

「魔改造ザク？、とは言ってもゲルググには劣るな。地上用の自機の変更は、出来ればゲルググにしたい所だ」

カイはそう考えるが、次に開発出来るようになる機体は、おそらく水中用だろうと予想していた。

このゲームはジオン版だった為に、連邦のＭＳは存在しない。

ジオンからティターンズの機体に開発を進めていくと、なっていくとカイは聞かされていた。

（ビーム兵器は水中戦用以外は、しばらく先になりそうだな）

カイはそう考えるが、それほど危機感は懐いていない。

あえていうなら、ビームを撃ってくる魔物が大量に現れれば危険だが、どうやら技術力が上がれば生産コストは少しずつ下がっていくらしく、対レーザーコーティングの必要ポイントが９５０に下がっていた。

しかも、レベルを1上げたので耐久性も上昇している。

このまま技術力を上げれば、レーザーを撃つ魔物も克服は可能。

他の敵は１２０ｍｍザクマシンガンの敵ではない。

一日が経過し、とうとうドムが完成した。

武装は３６０ｍｍロケット砲

どんな装甲も爆散させる破壊力を持っているだろう。

更にヒートサーベルはドム以外の全機にも配備し、ドムは合計１８生産した。

その内５機は拠点の防衛を、それ以外の２０機で魔物を駆逐していく予定だ。

ドムには全て最新式のＣＰＵＬｖ５を配備している。

加えて、全てのドムに対レーザーコーティングを施し、拠点のレベルを1上げる。

拠点にも強力な対レーザードームを張れる建物を建設し、拠点の防衛性を強化した。

その為か、自機の強化も合わせてかなりのポイントを消費し、懐(ポイント)がかなり寂しくなってしまった。

暫くポイント稼ぎに専念する事に決め、それから三日間は魔物の駆逐に専念した。

そして、三日間でドムを１０機増やし貯金を増やしカイは、次の予

定を考える始めた。

１２０ｍｍは強力なのだが、集中放火しなければ硬い前衛の魔物には弾かれる事がある。

３６０ｍｍロケット砲のお蔭で今は問題無くなってきたのだが、新たなマシンガンの開発は必要だろう。

更にまだ問題はあり、カイのザクの性能が急激に上昇した事により、カイはザクの性能に振り回される事が多くなってきた。

（反応速度上昇はポイントがかなり掛かるが、仕方ないか）

カイはそう思い自分の反応速度を１０％上昇させる、ジオン軍の兵法書　初級編　を１００００ポイントで入手した。

更に、反応速度を３０％上昇させる、ジオン軍の兵法書　中級編　も続けて５００００ポイントで購入し、カイは自分自身を強化させた。

すると、カイの技術力Ｌｖが６にレベルアップする。

（予想以上に早いレベルアップだ、自己強化は高額な代わりに技術

力が上がり易いのか？）

カイはそう考え、喜びに笑みを浮かべた。

次のＭＳの開発は技術力がＬｖ８必要だ。

何を開発できるかは、欄が？？？？？となっていて、わからない。

最初には技術力Ｌｖ３までの情報は、公開されていたのだが、それ以上はわからなくなっているようだ。

しかし、カイは叔父からある程度の攻略情報を聞かされている。

（アンドロイドの必要技術Ｌｖ１０必要だった筈だ。それ以外の情報もメモしておこう）

カイはそう思うと、紙に叔父から聞かされた情報をメモしておいた。

次に問題のザクマシンガンだが、口径を１５０ｍｍに変更し、尚且つ初速を上昇させ、射的を伸ばしたオリジナルのザクマシンガン、

ザクマシンガン巨砲型に変更しようとした。

しかし、通常のザク？では反動が強すぎて、実践で使えなかった。

よってカイは自機専用の兵器として、このザクマシンガンを使う事にし、これからはドムを量産していく事に決めた。

しかし、小型種にはザクマシンガンは有効で、しかも中型や大型もザクマシンガンで倒す事は可能だ。

その為カイは、一応ザクを十機は揃えておく事に決め、それ以外をドムにする事に決めた。

脅威の陸上型ＭＳ（後書き）

閲覧ありがとうございましたｍ（　）ｍ

巨大、進撃する要塞（前書き）

2話目投下します（＾ー＾）／

巨大、進撃する要塞

今日もカイは、魔物を狩り続けていた。

ドム４０機にザク１１機の部隊は、大量の敵を狩り続けてはポイントに変換していく。

（最近は作業になってきた、対レーザーコーティングで光線も対処できるようになったし、もうすぐ技術力がＬｖ８になるから、新しい機体も開発できる。
そろそろ行動範囲を広げてみるか）

カイはそう考え、部隊を何時もより進めて行った。

敵は突撃するしか能がないようで、次々とロケット砲の餌食になっていく。

時々ロケット砲の弾幕から敵が抜けてきても、ザクマシンガンによってひき肉にされる。

「むっ、あれは何だ？」

カイはＭＳ部隊を進めている最中、かなりの数の魔物をレーダーで察知した。

（これは何かあるようだな）

カイ部隊を慎重に進めていき、敵も徐々に近づいてきた。

「ちっ、レーザー型がいるのか」

カイは光線を撃ってくる敵の事を、レーザー型と呼ぶようになっていた。

超距離攻撃を仕掛けてくるレーザー型は、一番厄介だとカイは感じていた。

しかも、今回はカイは新しい種類の魔物を発見していた。

その姿は、カイの今まで見た魔物の中でも一番巨大で、鈍重な魔物だった。

その魔物は次々と体から小型の魔物を生み出し、カイ達に向かって殺到させてきた。

「ふん、デカブツが。
ここまで接近できれば、最早レーザー型も敵ではない！」

カイはそう言うとザクマシンガンを乱射し、先ずは厄介なレーザー型から片付けていく。

次にカイは巨大な魔物に標準を定めて、ザクマシンガンを発射する。

ザクマシンガンの弾丸は、敵の身体を抉っていくが、敵が巨大な為か致命傷を与える事ができない。

「弾丸の無駄か」

カイはそう言うと直ぐに武装を変更し、３６０ｍｍロケット砲を自機に装備させた。

通常のザクが反動で故障するような口径だが、カイの改造を施したザクは、壊れる事なく、このロケット砲を放つ事ができる。

ロケット砲の火が吹き、魔物に命中、続けて放ったドムの同口径のロケット砲も魔物に命中し、魔物を爆散させた。

「むっ、あの敵は一体１００００ポイント貰えるのか！
これは旨みがある敵だ」

実際には要塞型の体内にもＢＥＴＡがいる為だが、カイにはわからない。

カイはその後近づいてきた大型の魔物を見ると、ロケット砲を粒子に変えてビームサーベルを構える。

魔物の長く太い腕のような物がカイのザクに向かって振るわれるが、カイはその腕をヒートサーベルで切断し、更に魔物の身体を真一文字に切り裂いた。

「ははっ、最高だ！！」

カイは次にザクマシンガンを両腕に一丁ずつ生産し、辺りの小型な魔物を掃討する。

そして、最後にスラスターで部隊は空中に滞空し、その後クラッカーを下に投げつけ、一体残らず魔物を退治し終えた。

（巨大型は三体いたが、中には一体５０００前後の奴もいたみたいだ

この群れだけで、三万ポイントも稼げた。
巨大型は狙いだな）

カイはそう思い、更に敵を探しに部隊を動かした。

最近は開発に力を入れる事を止めていないが、ポイントの貯蓄もカイはある程度進めていく。

軽くしか読んでいなかった説明書をカイは最近じっくりと読み、ショートカット設定という機能をカイは、発見した。

ショートカット設定とは、例えば、ボタン一つでＭＳの生産と武装の生産、ＣＰＵの生産を一度に行うよう設定できるようにしたりできる機能で、これでカイは効率良くＭＳを補充できるようになった。

カイはザクの囮用や、ドムの補充用等を幾つか設定し、武器もボタン一つで変更できるように設定した。

これで部隊の武器を一瞬で変更したり、僚機が撃破された瞬間にまた生産して補充する事ができる。

「技術力Ｌｖ８になったら、拠点防衛用ＭＳを２０機と、自動補充施設を設置し、拠点の強化も進めるか」

カイは顎に手を当てて考えながら、そう呟く。

技術力Ｌｖ８の新ＭＳを生産したら、カイは三日かけて辺りを探索するつもりだった。

現在地が自動で確認できる、地図を生産できたのでカイは現在地が中国であるとわかっていた。

自動翻訳機も生産し着けたので、中国語でも理解できる筈だ。

できるなら、日本に行きたいとカイは考えていたが、今の状況がわからないので、とりあえず人を探す事が先決だと考えていた。

（本当は技術力をＬｖ１０まで上げてから行動に移した方がいいかもしれないが、いい加減ポイント稼ぎだけでは飽きるからな）

カイは更に数日でポイントを稼いでいき、ＭＳを増やす事に専念していった。

そして、その頃。

ようやくカイの存在に気づく国が出始めていた。

かなり遅い発見だが、各国は防衛にそれだけ必死なのだろう。

そして、カイの存在に最も早く気づいた場所は、カイの部隊を見て、何とか最初に接触しようと、模索を始めていた。

そして、その間もカイは開発を続けていく。

技術力Ｌｖは８に上がり、新たなＭＳが増えるが、カイはそれほど喜ぶことはない。

Ｌｖ８で開発できた機体はなんと４つ、ゴッグとアッガイ、ズゴック、そしてグフだ。

ズゴックはいずれ活躍できる筈だが、グフは完全に接近戦タイプであり、カイはグフの生産に乗り気ではなかった。

それ以外の二つは、生産されるかさえ微妙な所だ。

とりあえず４種とも一応開発はされたが、生産されたのはズゴック一機とグフ一機だけだった。

スゴックは様々な改造を施し、真紅と黒のペイントを施して、カイの水中専用機にする予定のようだ。

そして、カイは今回のＭＳはまだ使えないので、戦力は今回の開発ではそれほど変わっていないと判断し、拠点から離れる事を一旦断念した。

そして、しばらくは開発に専念していく事にして、技術力Ｌｖ１０を目標にする事にした。

巨大、進撃する要塞（後書き）

閲覧ありがとうございました～

カイの野望（前書き）

修正版です。

閲覧よろしくお願いしますm（__）m

カイの野望

魔物を狩り続け開発に集中した結果、ついに技術力Ｌｖが１０に到達した。

新たに開発できるようになった機体は、ゾック、ギャン、リックドムの三種類。

カイはおそらく次の１３Ｌｖで、ゲルググが開発できるようになるだろうと予想した。

そして、今回の目玉は何よりもアンドロイド開発だろう。

機体の操作Ｌｖは、アンドロイドＬｖを最大まで上げたＬｖ１０で、ＣＰＵのＬｖ１０と同等だったので、他の仕事もできる分、アンドロイドの方が優秀だ。

しかし、カイはいきなりアンドロイドを大量生産する事はせずに、男性タイプを４体と女性タイプ４体しか製造しなかった。

男性タイプにはそれぞれ改造したグフかドムに搭乗させ、女性タイプにはオペレーターをさせる事にカイは決めた。

続けてカイは蝿のような偵察機を開発生産し、更にレーダーも高性能に改良して、効率良く動けるようにした。

（所詮はアンドロイド欲情はしない。
オジキが見てたら、終わった後からかわれそうだしな）

カイはそう思うと、普段通り魔物を狩りに出発する。

ポイントの貯蓄がもうすぐで５０万ポイントになり、貯蓄が終わったら拠点を放棄して移動する予定だ。

「それにしても、本当に生きている人間に出会わないな。
まさか人類が絶滅した世界とかは、ない筈なんだけどな」

カイがそう言いながら、隊を進ませていると、レーダーに赤でも黄色でもない始めて見る、白い点が映し出された。

『未確認物体が現在魔物と交戦中です。
生態反応から、おそらく人間だと予測されます』

カイはオペレーターの言葉を聞き、どうするか考え始める。

これは果たしてイベントなのか、カイは考えるが答えはでない。

しかもオペレーターから更に詳しく聞くと、どうやら人間側の方が押しているようだ。

ここで加勢しても、混乱を生むだけだろうとカイは判断し、速やかにその場から撤退する事に決めた。

そして、カイ達は撤退し、しばらく進み続けるが、何故か再度白い点が前方から接近してきていた。

（何だ、先ほどとは別の部隊か？）

カイは考え、ドムとザク達に警戒態勢を取らせながらも、部隊の移動を停止させた。

すると、相手の部隊もカイ達の部隊が見える位置まで来ると停止し、両部隊は向かい合う。

相手の機兵の内、一番先頭にいる機兵はカイ達を観察していく。

大量のドムと十機のザク、それに四機のグフと真紅のザク一機。

相手の機兵は、カイがリーダーであろうと判断したようだ。

外部スピーカーで、カイに向かって声をかけてきた。

『こちらに敵意はありません、代表の方はいらっしゃいますか？』

相手は英語でそう話しかけてきた。

英語はおそらく公用語として扱われていると思われるので、相手が何処の国の機兵なのかはカイはまだ判断できない。

『私がこの隊の代表です』

カイはそう言うと、一歩前にザクを進めた。

『こちらは中華民国特殊戦術部隊です、そちらの所属をお聞きしてもよろしいですか？』

その言葉にカイは、一瞬考えた後答える。

『こちらはジオン傭兵部隊です。
国の所属では残念ながらありません』

カイがそう答えると、何故か相手の部隊にカイは歓迎され、その部隊の基地に招待された。

（……イベントか？日本軍かと思っていたが、台湾軍か。
まぁ、話しだけは聞いておくかな）

カイはそう思うと、１０万ポイント程消費し、自分の身体能力を二倍程に改造した。

カイは基地まで案内されると、ＭＳから降りて軍の司令官の部屋に案内された。

カイはジオン軍の弁術指南書を部屋に入る前に慌てて使い、司令官の部屋に入った。

司令官の部屋のカレンダーを確認すると、驚くことにこの世界はまだ１９７６年年らしい。

カイは司令官の話を聞きながら、平行して基地にばらまいた蝿型の盗聴機からも情報を仕入れていく。

そして、魔物がＢＥＴＡということ、ＢＥＴＡの進行で中国がかなり追い込まれている事等がわかった。

そして、追い込まれた中国は中華民国に共闘を提案してきたらしい。

台湾と中国は元々政治的には犬猿の仲だった。

しかし、こうなってしまったら中国に頼るしかない。

何故なら台湾は小さく、中国の助けがなければ、ＢＥＴＡに呑み込まれるしかないからだ。

しかし、その状況で台湾はある地域で、ＢＥＴＡが次々に駆逐されているのを発見する。

カイ達の部隊だ。

そこで中華民国政府は、カイに協力を依頼し、ＢＥＴＡから台湾を守りたいのだそうだ。

（提示された額はなかなかだな、ドル払いなのもいい。
もし、裏切っても蝿型の偵察機で丸わかりだ）

「わかりました引き受けましょう」

カイはそう考え、依頼を受けることにし、司令官と握手を交わした。

そして、カイはそれからめざましい活躍を戦いの中で中華民国に見せつけていく。

ドムの３６０ｍｍによるＢＥＴＡの駆逐、しかも無限に弾を絶やす事なく打ち続けていく。

その上、カイの部隊のＭＳに搭載されたＣＰＵは八時間稼働したら一時間休憩が必要だが、実質一日に三時間も休憩せずに働かせる事ができる。

しかも、ＭＳは破壊されてもすぐ補充され、逆にＢＥＴＡを倒す程、ＭＳの数はどんどん増えていく。

（金は貰える上に、ドムの数は既に５００機を越えた。
イベントは起きないが、今のところ順調だな）

そして、カイの防衛力を過信した中華民国は、中華人民共和国の共闘要請を拒否。

中華民国政府は、カイを手放す事が出来ない状態に自分達を自分から追い込んでしまった。

（犬猿の仲だとは思ったが、ここまで愚かな判断をする程だとはな）

カイはそれを聞いて呆れていたが、まぁ色々事情があるのだろうと自分を納得させた。

台湾を守るためにカイは、現在それなりに苦労していた。

相手の物量攻撃は今まで戦った時の比ではない程激しく、その為ＭＳは次々に破壊されていった。

そのためカイは、一旦開発を停止し、ＭＳの生産に集中した。

一体破壊される度に三体生産する感じでカイは、次々にドムとズゴックを生産。

ドムだけで現在は５００機。

ズゴックは３００機程稼働している。

ズゴックは水中専用であり、島国である台湾を守るのにはかなり適している。

更にカイは台湾政府と交渉し、台湾に食品会社を設立した。

台湾は現在、中国からも食料が輸入できず、深刻な食料問題に直面している。

そこでカイが僅かなポイントでそこそこ上手い食料をどんどん生産し、どんどん安く売っていき、民衆も喜び、カイも喜ぶ。

食料生産は、ポイントがほとんどかからなくなってきたので、リスクは少ない。

作業用のアンドロイドにポイントを消費するが、そこは割り切るしかないだろう。

そして、更に１ヶ月が経過すると、また新たな問題が浮上してきた。

それは今まで只でさえ大打撃を受けていた台湾の食品会社が、カイの会社の安価な食品が出回ったせいで次々に倒産。

大量に浮浪者が増え始めたようだ。

カイもそれは予想していたが、仕方ないとも思っていた。

千人浮浪者が出るかもしれないが、そのお陰で二千人が餓死せずに済むかもしれない。

だが、台湾政府はそれを黙って見ている訳にはいかない。

雇用の促進と、ＢＥＴＡの対策の為、軍備を拡張する事を表明した。

それを聞き付け、カイはザク？とアッガイの販売を政府に打診した。

アッガイとザク？は生産性に富んでいて、今のカイの技術力Ｌｖである１２ならば、様々な武装付加を施しても、一機につき８００ポイントで済む。

しかも、その機体がＢＥＴＡを倒したら、カイにポイントが入ってくる。

現在対ＢＥＴＡの主力は戦術機だが、まだ第一世代。

ザクは機動力こそ、第一世代より少し高いだけだが、火力は第三世代並み。

しかも、ヒートサーベルによる接近も可能。

操作方法はどちらかの手でレバーを掴めば、まるでゲームのように簡単に動かせる仕様だ。

カイの打診の後、戦術機第一世代とザク？が未来で行われた事を再現するかのように対決する事が決定した。

ザク？と対決する機体はＦ－４ファントム。

アメリカ製の第一世代戦術機だ。

Ｆ－４ファントムには台湾人パイロットが乗り、ザク？にはカイが生産したアンドロイドＬｖ１３が乗ることになった。

ザク？とＦ－４ファントムが対峙し、試合は開始された。

Ｆ－４ファントムの武装は１０５ｍｍ滑腔砲と機関銃。

機関銃はザクの強化された装甲にはそれほどダメージを与えられない。

その上、１０５ｍｍの滑腔砲は旧ザクが使っていたザクマシンガンの劣化品。

火力もザクが上回っている。

Ｆ－４ファントムの滑空砲を回避し、ザクはカイによって追加されたホバーによってＦ－４ファントムとの距離を詰める。

防御力が高い第一世代戦術機のだが敏捷性はザクには劣る。

ザクはヒートサーベルをＦ－４ファントムのコックピットに突き付ける。

そして、勝敗は決した。

政府はしばらくの検討し、ザク？１００機をテスト用に導入する事を決定した。

そして、ザクは中国本土において戦いでめざましい成果を上げていくのだった。

ザク？の生産開始。

しばらくした後、アッガイの生産も開始する。

両機の値段は第一世代戦術機の十分の一程だ。

問題点はザクの修理が不可能な点だが、カイが簡単に使用できる修理用機器やエネルギー補充用の機器を販売し、問題は解決した。

ＭＳの生産には、カイが設置した拠点を利用。

技術Ｌｖ１２で出現した、拠点開発の一つである量産機工場を設置し、地元の住民を雇っていった。

これを設置してＭＳを生産すると、量産機ならばポイントの消費が抑えられるようだ。

（これって内政ゲームだったか？）

カイは疑問を懐くが、叔父がやろうと思えば、ジオン公国を建国できると言っていたのを思い出した。

（かなり自由度の高いゲームだからな、もしかしたら台湾を足掛かりにして、ジオン公国を作れるんじゃないか？）

カイはそう考え、これからの予定を頭の中で考えていく。

カイの野望（後書き）

閲覧ありがとうございましたm（__）m

新進気鋭のＭＳ軍団（前書き）

今回はツッコミ所が多いかも、反応が怖い。

感想をくれた皆様ありがとうございました。

閲覧してくださる皆様にも、感謝していますｍ（＿＿）ｍ

新進気鋭のＭＳ軍団

中華民国が中華人民共和国から完全に独立を宣言。

それに反対した中華民国の政治家は、中華民国から脱出し、中華人民共和国と手を結んで統一中華戦線を結成した模様。

しかし、それでも統一中華戦線はＢＥＴＡに押され続け、後退し続けているようだ。

カイはゲームの世界で既に１００日、つまり現実で１０日経過したのだが、まだ出るつもりなかった。

カイはまだゲームをクリアできそうもない為、ある手段に出た。

それはゲームの世界と現実世界の時間を更に離す事だ。

具体的には、現実世界の１日をゲームの世界の１００日にする。

これでカイは後８年近く、この世界にいる事ができる。
これをやると、ゲームが終わった後に頭が痛くなるらしいのだが、カイはやむを得ず決行する事にした。

そして、カイがゲームの設定を弄った瞬間、現実世界で植物人間と化していたカイの身体は、死亡してしまった。

しかし、カイはそれに全く気づく事はなかった。

そして、カイはその日、ＣＰＵと台湾軍兵士から供給されたポイントを使い、開発を進めていた。

そして、それが終わると予定されている、台湾政府総督との対談が行われる施設に、アンドロイドの秘書を連れて向かう。

「貴社のザクは相変わらず素晴らしい性能を誇っていいます。
しかし、一部のパイロットからは機動力に不満が出ていると報告が出ています。その辺りは改善はできますか？」

カイは台湾総督と握手を交わし、席に座ると早速そう尋ねられた。

「そうですね……我が社の傭兵部隊で正式に採用されているドムを配備できます。
しかし、やはりザクと比べるとコストが掛かりますので、値段も上がってしまいます」

カイは総督にドムのスペックが書かれた紙を手渡しながらそう伝え、それからドムの性能を総督に伝えていく。

目玉はやはり、強化されたホバーにより、第二世代戦術機並の機動力を実現した所だろう。

しかも、近づく敵に対しては胸から拡散ビームを隠し持ち、小型のＢＥＴＡなら仕留める事ができる。

更にドムの主装備のロケット砲、ジャイアント・バズは、確実にＢＥＴＡを仕留められ、要塞級を数発で仕留める事が可能だ。

そして、カイの交渉で少しずつだがドムも配備していく事に決定した。

数万の大群で責めてくるＢＥＴＡに対して、ＭＳはこれまでかなり少数だったのだが、今はザクを何と一万体生産する事に成功している。

最も、台湾の人口はＢＥＴＡの襲撃により減少し、人口は１１３０万人程しかいない。

最も中国で台湾上陸に備える兵士を入れれば、もう少し増えるが。

よって、一万のザクの内８０％以上はカイのアンドロイドだ。

なので台湾の総督は、カイに大きな態度を取る事ができない。しかも、カイの部隊を傭兵として雇う費用の一部を、台湾政府は勲章や軍の位等で免除してもらっている。

因みにカイはそのお蔭で、カイは中華民国ＭＳ部隊指令の位をもらい、現在少将として働いていた。

名目上政府が上だが、政府はカイに頭が上がらず、中将や大将も無闇にカイに命令できない。

カイは総督との話を終えると、自らが建設した軍事基地に向かい、あるＭＳの前に立っていた。

「遂に完成したか……ゲルググが」

カイの目の前にはザクに類似した、新たな機体が佇んでいた。

深紅地に黒い線を走らせた、カイ専用の塗装を施してあり、既に前のザク以上の改造が施してあった。

「愛機（ザク）から変えるのは残念だが、ザクを改造するにも、残念ながら限界があるようだったからな」

カイはそう言うと、ゲルググに搭乗し、しばらくの間操作練習に励んでいく。

（まだ微妙に機体と操作が一致しない。
慣れるまではザクの方が、良さそうだな）

そう思い、練習を終了させた。

実はゲルググの後に更にもう一機生産が可能になったのだが、カイはまだそれを生産すらしていない。

その機体の名はビグ・ザム。

その全高はザクの約三倍の５９，６メートル。

３６０度全方向にメガ粒子砲を放つ事ができ、艦艇を一撃で仕留める威力を持つ。

しかし、ゲルググのビームライフルもそうだが、ビーム兵器を無闇に使うのは、よろしくないとカイはこの世界の技術力を見て感じていた。

普通のゲームならば、気にせずオーバースペックで無双してもいい気がするが、これはカイの叔父が作成したゲームだ。

あの凝り性の叔父が作ったゲームでそれを行うと、どうなるのか予想できない。

一先ずカイは、ビーム系兵器を水中戦用のＭＳにのみ使用させ、水中でしかビーム系兵器を使えないと思わせるようにした。

そして、かなり遅れて何故か突然連邦のボールが、開発可能になっていた。

カイもこれには首を傾げたが、もしかしたら叔父が連邦のＭＳもかなり遅れてなら生産出来るようにしていたんだと自己解釈し、納得する事にした。

最もボールは生産性は高いが宇宙でしか使えず、ザクの蹴りでやられるレベルなので、カイは開発こそしたが、生産はしなかった。

そして、更にゆっくりと時間は経過していく。

カイが台湾軍に入隊してから、一年が経過しカイの技術力はレベル２０となった。

Ｌｖ１９から２０までの過程で、かなりの開発が必要だったので、Ｌｖアップも徐々に遅くなってくるだろう。

カイが今回開発出来るようになったのは、ガルバルディαとガンタンクだ。

未だザクが主力の戦場ではハイスペック過ぎるため、ガルバルディαの生産は未だ行われていない。

逆にガンタンクは操作しやくなる機能が予想以上に効果を発揮し、初心者でもほとんど訓練無しで乗れる程の、操作しやすい機体になっていた。

その為、後方支援用に韓国軍に出荷していく事が決定し、ＢＥＴＡに対して成果を上げていった。

そして、最近ではＭＳの情報を盗もうとする産業スパイが、多数カイの設置した工場に侵入するようになっていた。

しかし、ＭＳの生産はアンドロイドがほとんどを行い、民間人は簡単な作業を行う仕事にしか着けないので、各国のスパイはなかなか情報を手に入れる事ができない。

しかも、アンドロイドが組み立てるので、ＭＳの設計図はアンドロイドの媒体の中にしか入っていない。

アンドロイドを脅しても意味がなく、アンドロイドを破壊すれば粒子となって消える。

ザクも同様に、破壊された部品は戦場で回収できず、解体する事も粒子となる為不可能だった。

その間にも歴史は進む。

欧州では連合軍が大反功が実行され、ＢＥＴＡの拠点であるハイヴへ連合軍が襲撃した。

しかし、結果は惨敗。

欧州の連合軍は致命的なダメージを受け、兵力を大幅に失った。

カイはその作戦の一部始終をスパイさせていたアンドロイドのアイカメラから見ていたが、ハイヴに蠢く凄まじい数のＢＥＴＡを見て、ＢＥＴＡの危険性を再認識した。

（ＭＳに慣れていなかった台湾兵も、一年の間に練度を上げていった。

そろそろザクのスペックを向上させ、発表する事にするか）

カイがそう考えた三ヶ月後、カイは新たにザク？改修型を発表、基本能力を全てドム並の機動力と全体強化を施されたザクが台湾兵士に支給されていった。

カイが考えるザクの展望は、何かを犠牲にする事なく、全体を強化していくバランスの良い機体だ。

防御を犠牲にしたり、機動性を犠牲にして突き詰めていくのは、他の機体でやればいいと、カイは考えている。

実戦で戦う兵士達からのザク？改修型に対する評価は良好だったが、

一部ドムを愛機としている兵士から不満の声が上がっていた。

機動力が売りのドムとザク改修型の機動力が同じでは、ドムの影が薄くなっていく。

その為カイはザク改修型発表の半年後、要望に答えてドム改修型を発表した。

機動力が更に増加され、ジャイアント・バズにも改良を加えられたドムの機動力は、戦術機第三世代に匹敵し、火力はそれ以上だ。

しかも、ザクより遥かに強固な装甲は、犠牲にされる事はなく、逆に多少強化された。

これらの無茶な性能強化が可能になった背景には、カイの技術力レベルがＬｖ２２になったという背景もあったかもしれない。

ドム改修型の生産は月産３０機程だったが、台湾兵がドム改修型を見る機会も徐々に多くなる。

凄まじい攻撃に加えて機動性に富み、ザクよりも強固。

台湾兵からは、高機動要塞等と呼ばれる事もあったようだ。

そして、カイは久しぶりに台湾から離れ、ユーラシア大陸へと降り立っていた。

理由は今まで訓練したカイ専用ゲルググの実戦を、カイ自身が行う為だ。

ジオンの兵方書　上級編を使ったカイの反応速度は二倍になっており、練習によってゲルググの習熟度を上昇させていた。

武装は高出力ヒートサーベルと、ザクマシンガン改。
カイによって改造が加えられており、性能的にはあのガンダムよりもハイスペックだ。

久々の実戦にカイは多少緊張していたが、ＢＥＴＡの大群を前に気を引き締める。

『あんまり先行しないでくださいね』

カイが進もうとするとカイの直ぐ後ろにいる、四機のＭＳの内の一機がそう言った。

その男の名はシメイと言い、カイの側近の一％それ以外の二人の側近はアンドロイドだが、アンドロイドＬｖ２０は、人間との見分けが全くつかない程の完成度であり、人間よりもスペックはかなり高い。

台湾人の側近二人はそれなりにＭＳが扱えるが、実戦兵士には劣る。

その為、操作性と使いやすさに台湾軍でも定評のあるザク？改修型に搭乗していた。

因みに、側近のザクには頭部にブレードは付いていない。

そして、アンドロイドの側近二人は、第一線で戦う兵士すらも上回る操縦が可能だ。

その為機体は、新たに開発された機体であるドワッジと、グフを改造したグフカスタムに搭乗させてある。

ドワッジはドムの発展機体であり、ドムを越えた更なる機動力と、砂漠でも壊れない頑丈さがうりの機体だ。

グフカスタムも側近戦に置いては、他の追随を許さないスペックとなっている。

その他にも、ドム十機とザク二十機を引き連れた部隊は、ＢＥＴＡに向かってＭＳを進めて行く。

『前方にＢＥＴＡの反応があります。
総数は約３００体ほどだと思われます』

オペレーターの言葉を聞き、カイは口許に笑みを浮かべる。

ようやくゲルググの実戦を行えるのだ。

カイが出撃する事に、台湾政府も猛反発したのだが、結局カイが押しきった。

台湾政府は、今や台湾の心臓部分であるカイが負傷した時の損害を予想し、顔を青くさせていた。

『「問題は何もない、このゲルググは現在この地上で最強のＭＳ……いや、現在では地上最強の人型兵器だ」』

カイはそう言うと、ＢＥＴＡの大群に向かって突貫する。

無線でその言葉を聞いた瞬間に、カイが突貫し始めたのを見て側近達は驚き、ＭＳの動きを停止させた。

しかし、それ以外のＭＳはアンドロイドとＣＰＵしか搭乗、搭載されていないので動揺しない。

直ぐ様援護射撃を行い、側近のグフカスタムはカイに付き従って突貫していく。

『「ははっ、遅い遅い」』

ＢＥＴＡの光線を凄まじい勢いと反射神経で避け、カイは笑いながらそう言った。

突き進みながらも、ゲルググはザクマシンガン改をＢＥＴＡに掃射し、次々とＢＥＴＡを片付けていく。

『「現最強のスペックを見せてやろう」』

カイが改造が施されたヒートサーベルを振るうと、ヒートサーベルの刃が伸びる。

カイはヒートサーベルを自由に伸び縮みさせられるよう改造し、更にヒートサーベルの出力も強化していた。

『「ふむ、３００では手応えがないな」』

ゲルググの周りには血によって大量の血溜まりが形成し、その中でも真紅のゲルググは側近の目にも良く映った。

『「やはりザクに比べるとクセが多少あるが、特に問題も見当たらない。
次の群れと戦う時には、アレを試してみるか」』

カイはそう言うと、ポイントで変換したドリンクを飲み、一息つく。

台湾近辺の中国は、まだＢＥＴＡに対して戦線を維持している。

しかし、それ以外は押されているらしい。

（これは支援も考えるべきかもしれないな）

カイはＢＥＴＡを踏みつぶしながら、そう考えていた。

新進気鋭のＭＳ軍団（後書き）

どうだったでしょうか？

カイ専用ゲルググに関してですが、本来のゲルググよりも更にポイントをつぎ込んで生産した、魔改造です。

ゲルググは地の利もありましたが、ＺＺでも使われて活躍はしています。

魔改造を施せば、Ｚくらいの機体には追い付けるのではないかと思ったり。

ポイントコストは、カイは自機の為に気にしていません。

実はカイのゲルググには、更に秘密がありますが、それはまた……。

後皆様にお聞きしたいのですが、戦術機は１師団につき１０８機ですよね？

多くても１師団で、３２４機だと自分は思っています。

違うのなら、どうか教えてください。

合ってたら、ＭＳの数がとんでもない事が発覚してしまう（^__^；）

外交の始まりと戦いの始まり（前書き）

今回は前編です、お楽しみ下さい。

外交の始まりと戦いの始まり

そろそろ外交にも力を入れないと不味い状況になってきたと、カイは思い始めてきた。

台湾は中国から独立したはいいが、そのせいで中華統一戦線との関係は余計に悪化している。

更に台湾は他国との繋がりも薄く、ＭＳには多少世界の目が向けられていたが、各国は戦術機の開発に現在忙しく、そこまで注目はされていない。

そこでカイはまず、交易によって国交を繋いでいくという、安直な手段を取ることにした。

安直な手段なのだが、カイの能力があれば、国交とプラスして外貨も稼ぐ事ができる。

そして、肝心の輸出する品物だが、カイが目をつけたのは　食品だ。

カイは台湾の近海に巨大施設を建設させていく。

生産能力を使いながら、ＭＳとアンドロイドも導入して建設の効率を上げ、施設は僅か１ヶ月で完成した。

ちなみに政府には了解をとり、最近では政府にも少しずつアンドロイドの人員を潜ませていき、密かな支配をカイは進めていっていた。

台湾近海に建設された巨大施設は、大量の食料を生産する為の工場だ。

人工的に食料を作る技術はこの世界にもあるようなので、遠慮はいらない。

カイは工場でどんどんと食料を生産していった。

そして、本物と味も見た目も変わらない人工食品は、日本と韓国に輸出した。

値段は人工食品と同じ値段で、味は天然物と同じ台湾の食品は、日本と韓国で反響を呼び、続けて中国にも輸出される事となった。

食料輸出国であるオーストラリアやアメリカからは、多少非難されたが、食料の需要はなくならないので、そこまで責められる事はなかった。

更にＢＥＴＡに押され続ける中国に対して、ＭＳ部隊の派遣を打診。

向こうは揉めたようだが、ＭＳ部隊の派遣は結局受理された。

ＭＳはやられると粒子になる為、技術が盗まれる心配はない。

が、ＭＳが一瞬で消えていくのは、余りにも不自然過ぎる。

今さら遅いかもしれないが、カイは技術Ｌｖ２１で手に入れたブラックボックスという名の改良を、概存の全てのＭＳに施した。

ブラックボックスを施すと、ＭＳは壊れても粒子化しなくなる。

更に大破したザクを回収されても、隠したい部分だけ複雑になったり未知の金属の部品となったりして、技術の秘匿を行える技術だ。

実はＣＰＵにも、違和感を持たれていたのだが、それについてもカイは説明している。

少年ジャンプで連載されているトリコに登場するＧ―Ｔロボ、から取った設定を使って。

実際に作ったその機能に、カイはわざと決定を作っていた。

特殊な服を着てヘルメットを着け動くと、操作しているザクがその通りに動くという機能は、台湾政府に注目され、危うく世界にも目を向けられそうになった。

だが、その機能にも欠点があり、操縦者の運動能力が大いに機体の性能を左右してしまい、機体の本来の性能を発揮できない所がある。

他にもカイは、ＭＳの壊れた部分に痛みが完璧にフィードバックする機能もつけていた。

これにより、ＭＳの死亡＝操縦者の精神的な死になり、それなら普通に操作した方がマシだという事になり、カイはホッとした。

ＣＰＵの方が前述の機能より、遥かに低コストで尚且つ強かったからだ。

そしてカイの傭兵部隊は相変わらず、痛みに対して訓練しているという設定で、ＣＰＵを使いまくっていた。

暫くすると、中国との関係も、中国が押されている事もあり、中国の方から近づいてきた。

カイはこの間にも台湾近海に更に巨大軍事基地を建設し、アンドロイドとＭＳを大量に建設していく。

基地を派手に建設できるのは、世界の目がまだ台湾に向いていない今が最後のチャンスだ。

カイは自重せずに、要塞を凄まじい勢いで近海二ヶ所に建設した。

更にカイは微妙に悩んだのだが、ジャブロー計画を台湾軍部と話し合っていた。

台湾近海に超巨大水中基地を建設、ＢＥＴＡに備える計画だ。

カイが迷った所は、地球連邦の本陣営の名前をジオン軍側が付けていいのか、という所だが、カイが今いる場所は地球。

コロニーではないので、結局結構する事に決めた。

そして、その頃になると徐々に台湾政府と軍部にも、裏でカイが操るアンドロイドが、侵食し始めていた。

後は時間をかけて侵食すれば、何れカイが軍も政府も裏から支配できる。

（そろそろＢＥＴＡ殲滅後も、視野に入れてミノフスキー粒子を開発するか）

カイはそう考える。

ミノフスキー粒子とは、高性能なレーダーや探知機を使えなくさせる兵器であり、これをばら蒔けば他国はミサイルも戦闘機や潜水艦のレーダーも使えなくなる。

最も、これはＢＥＴＡ戦後に使用する兵器。

かなり後にならないと、使用される事はないだろう。

「閣下、大変です！

台湾に向けてＢＥＴＡの大群が進行中という連絡が入りました！！」

カイの部屋にカイの側近の一人であるシメイが入ってきて、そう伝えてきた。

「そうか、数は？」

（まぁ、そろそろ来るとは思っていたがな）

カイはそう予想していたので、慌てた様子は無い。

中国が今まで必死に抗戦し、台湾も援護していたが、もうそろそろ限界だと思われていたからだ。

「進行してくるＢＥＴＡの数は十万を越えています。中国に配備されている、８０００機の機体では厳しいかと思われます」

シメイがそう言うと、カイは直ぐに援軍の手配を進めさせる。

「俺も出る。
とにかく時間が惜しい、急ぐぞ」

カイはそう言うと、席を立ち中国へ向かう準備を始めた。

一方、中国ＢＥＴＡを向かえ撃つＭＳ大隊は、緊迫した雰囲気に包まれていた。

ＭＳ８０００機に対して敵は十万以上のＢＥＴＡ達、状況は絶望的だ。

しかし、ＭＳ８０００機というのは、決して少ない数ではない。

他国の師団にもＭＳ部隊が存在するが、通常は一連隊しかいない。

戦術機の連隊は通常１０８機。

日本から中国に派遣されている師団には、三連隊の３２４機派遣されるらしいが、それでも所詮それだけだ。

今ここに存在するＭＳの中でガンタンクを抜いても、日本の戦術機数より今の台湾軍のＭＳの機数の方が多い。

しかし、台湾軍にはＭＳしかない。

艦船の数はまだ少なく、援護射撃はガンタンクに任せるしかない。

他国の軍では、戦術機を援護する戦車部隊と戦艦が多くいるのに対して、台湾軍は遅れを見せていた。

（大丈夫だ、此方には最新式のＭＳである改修型が配備されている。しかも、いざとなったらアレを起動させる許可をカイ閣下から頂いている）

台湾防衛軍の指揮官は、初の大規模戦闘に緊張し、顔を青くさせながらもそう自己暗示をかけようとしていた。

既にＭＳ７０００機と少数の戦車部隊が出撃し、敵を向かえ撃つ準備は整えている。

台湾に向けて海を渡る前に、中国で食い止める。

台湾兵士達は覚悟を決め、ＢＥＴＡの到来をひたすら待ち続ける。

地面が微かに揺れる。

地平線の向こうに黒い線が走り、台湾兵士の頬を一筋の汗が流れる。

指揮官がゆっくりと息を肺に溜めていく。

指揮官は開戦前に既に汗をかきはじめていたが、青いその顔色からその指揮官に掛かる重圧の重さがわかる。

「……っ、放てぇぇぇぇ！！！！！」

指揮官の声の一瞬後、空気が爆発するような轟音が、辺り一体に響き渡る。

ザク？のマゼラ・トップ砲２４０ｍｍとガンタンクのガンタンクの１２０ｍｍキャノン砲の弾丸は、雨のようにＢＥＴＡに降り注いでいく。

命中はした、しかし兵士には相手に攻撃が有効だったのか、確認する事はできなかった。

数が多すぎる。

余りの敵の数に、ダメージを与えられたのかすら、確認する事はできない。

戦車の主砲を武器としたマゼラ・トップ砲の弾は、凄まじい破壊力で敵を葬る。

しかし、それを乗り越えＢＥＴＡは止まる事なく進行を続ける。

「来るな、来るな、来るな、来るなぁぁぁ！」

兵士は汗を滴らせ、マゼラ・トップ砲をＢＥＴＡに向かって乱射する。

弾丸はほぼ無限大、補給できれば尽きる事はない。

そして、ＢＥＴＡも黙って攻撃を受けているばかりではない。

空が光り、凄まじい速さで光線がＭＳ部隊に向かって、飛来して来る。

しかし、それはＭＳに当たる事なく、途中透明な壁に阻まれる。

「対レーザーフィールドの構築がギリギリ間に合ったか」

「はっ、ＭＳの光線による０との事です」

指揮官は部下の言葉でホッとしたが、まだ戦いは始まったばかり。

敵は止まる事がないのだ、何れ確実に接近線となる。

そして、ついにＢＥＴＡの先方である突撃級が、ジャイアント・バズの射程に入る。

機動要塞とすら呼ばれるドムのジャイアント・バズは、パイロットが自慢するような破壊力を持っている。

何しろ３６０ｍｍの巨大砲だ、これを受ければＢＥＴＡの要塞級も只ではすまない。

「ドム部隊、もっと遠慮せずに敵に念入りに弾をぶち込んでいけ。ザク至上主義者供を黙らせろ」

ドムの発展機であるドワッジに乗った部隊の隊長は、ドム部隊に向

かってそう鼓舞していく。

ついにＢＥＴＡの姿が、兵士達の肉眼でぎりぎり確認できる距離へと近づく。

「前衛前へ」

ザク改修型の部隊がヒートサーベルを構え、前へと並ぶ。

前衛の全てのＭＳは、ＣＰＵが操作している。

破壊を恐れず、全ての機体は突撃して行くだろう。

「進メ」

グフカスタムに乗った最新型ＣＰＵの言葉で、ザク部隊は足に仕込まれたホバーにより、凄まじい速さで突撃していく。

怯えを見せる機体は一機も存在しない。

前衛のザクとグフ達は、まず突撃級にクラッカーを投げつけ、突撃級の勢いを多少削いだ後、ヒートサーベルで敵に切り込んだ。

ヒートサーベルは、強固な突撃級の装甲を切り裂き、その有効性を後方の兵士達に見せつける。

しかし、デストロイヤーと呼ばれる突撃級は、停止と言う言葉を知らない。

ザクが突撃級を次々とヒートサーベルで仕留める中、同時に突撃級とザクとの相討ちが次々に発生していく。

数は敵の方が多いのだ、相討ちされたらＢＥＴＡの方が圧倒的に有利。

ザクは器用にホバー移動で突撃級の自爆特効を回避しながら、ヒートサーベルで突撃級を片付けるが、余りのＢＥＴＡの多さに回避しきれない。

その為空中にスラスターで逃げるが、その瞬間光線級のレーザーによる集中砲火を受ける。

いくら対レーザーコーティングを施されたザクでも、レーザーによる集中砲火を受けては耐えきれず、空中で爆散していった。

「大群の突撃級は厄介過ぎる。が、第一陣の前衛は良くやってくれた」

前衛が戦っている間にも、集中砲火は続いていたのだ。

突撃級は粗方片付けられていた。

（先鋒は倒したが、戦いはこれから。
にもかかわらず、此方の前衛第一陣は壊滅状態か）

指令官はそう思いながら、近づくＢＥＴＡの第二陣を睨む。

二陣で咆哮を上げるのは、戦車級と要撃級。

突撃級もその群れの中に混じっている。

「要撃級と戦車級はザクマシンガンが利くぞ！
撃ちまくれ！」

ザク改修型に乗る隊長がそう叫ぶが、叫ぶ前にザクマシンガンは弾を吐き出していた。

ザクマシンガンで突撃級も倒せはするが、当たり所によっては弾かれる。

だが、特に戦車級はザクマシンガンで確実に仕留められる種類だ。

要撃級が長く無骨な腕で前衛のザクを蹴散らすのを見て、兵士達は冷や汗を流す。

ＢＥＴＡとの距離は確実に縮まってきている。

「舐めるな！台湾をこんな所で貴様何かに潰されてたまるか！」

グフに搭乗した兵士が叫び、兵士も混じった前衛第二陣が突撃する。

グフとザク部隊のパイロットは、雄叫びを上げながら要撃級に切り込む。

声が涸れるまで叫び、ヒートサーベルをひたすらグフは阿修羅のごとく振るっていく。

「あのグフ一機、やけに強いぞ。
グフってあんなに強いのか！？」

兵士の一人が乗るグフの姿を見て、ドムに乗る兵士の一人が驚きの声を上げる。

だが、前衛の奮闘も虚しくＢＥＴＡは、前線を突破してきた。

要撃級の長く硬い腕がドムの装甲を削り、戦車級がザクに引っ付き装甲を噛みちぎっていく。

「や、やめ……ぎゃああ！！」

また一つ、また一つとＭＳが爆散し、ＢＥＴＡの群れはＭＳを呑み込んでいく。

数は力だが、戦争ならば指揮官を倒す事で、戦いを勝利に導く事ができる。

しかし、ＢＥＴＡの指揮官は戦場にはいない。

例え最後の一匹になろうとも、ＢＥＴＡは愚直に進んでいくだろう。

そもそもＢＥＴＡにとって人間は敵という扱いですらなく、ただ害虫を処理するかのように、淡々と片付けていくだけの物体だ。

「と、止まれ、止まれよぉ」

顔中を汗まみれにさせながらパイロットが乗るドムは、ジャイアント・バズを突貫してくる突撃級に向かって放つ。

突撃級の硬い装甲ごと、ロケット砲は相手を仕留める。

だが、次の瞬間倒れた突撃級の後ろにいた突撃級は、倒れた突撃級を吹き飛ばして、ドムに向かって突き進んで来る。

パイロットは更にドムに、ジャイアント・バズの引き金を引かせる。

しかし、弾は発射されない。

「あれ、何でだ、何でだ?早くしないと、早く、早く、あぁぁぁぁ!!」

単純に弾切れだろう。

しかし、パイロットはひたすら焦り、冷静になれない。

そして突撃級の体はドムの体を直撃、ドムの体は激しく仰け反り、ドムの機体は転倒した。

倒れたＢＥＴＡを弾いた為か、突撃級は減速していてドムは完全には破壊されていない。

パイロットは慌ててドムを起き上がらせようとするが、それを次に来たＢＥＴＡが阻止した。

ドムの体に要撃級のＢＥＴＡが乗り掛かり、歯をくいしばっているような表情の目のないＢＥＴＡの顔が、ドムのモノアイによってパイロットの目にアップで映る。

待て、パイロットは言おとした、ＢＥＴＡに聞こえる筈もないのに。
次にパイロットが見たのは、自らに迫る巨大な腕。
戦場にまた一つの命が、ＢＥＴＡによって　駆除　された。

「やむを得ん、更に応援で５００出せ」

「しかし、基地の防衛が」

作戦指揮官の言葉に、部下がそう返す。

「援軍が後３０分程で到着するのだ。
何としてもその間は、ＢＥＴＡを前線で止めなければならん。
基地を破壊されたら、最早補給はできなくなる。
アレも出撃させるぞ、許可も頂いた」

指揮官の言葉に、部下は敬礼して応えると、指揮官の部屋から出て行った。

指揮官は今でこそようやく平静を装うことができが、モニターから見える光景には内心凄まじい恐怖を感じている。

モニターを見ながら、無線で指示をＭＳ部隊隊長達に指示を出していくが、その隊長達もＢＥＴＡによって、殺されていく。

（アレで時間を稼げなければ、もうお仕舞いだ。
ＢＥＴＡは無尽蔵にいるかのように、溢れている）

指揮官はそう思うと、ＭＳ収納庫がある方向に一瞬目を向け、直ぐに指揮を続けた。

「ビグ・ザム起動」

『問題ありません、ＭＡ－０８対ＢＥＴＡ用試作機の、出撃を許可します。
中華民国に栄光あれ』

「出撃する。
中華民国に栄光あれ」

外交の始まりと戦いの始まり（後書き）

閲覧ありがとうございました、後編は明日投稿する予定です。

終戦　赤い刃（前書き）

今回が一番批判が来そうかな？
１９７７年は昔過ぎたかと、反省しています。
そのせいで、原作が遠い。
ですが、早すぎとの意見もあるので、もう少しテンポは落とすべきかと考えています。

終戦　赤い刃

中国に向けて、全速力で台湾の艦隊は進む。

事態は一刻を争う。

援軍が遅れ、要塞が陥落すれば、次は台湾が戦場と化す恐れすらある。

「……によって、ＭＳ部隊は後退を続けているようです」

台湾軍の戦艦の一室でカイは側近のアンドロイドから、そう報告を受ける。

「そうか、では直ぐ出撃だ。
最新アンドロイド兵１０人を呼び、ＭＳの準備にかかれ」

カイがそう命令すると、アンドロイドの側近は敬礼し、戦艦の一室から去って行った。

（ＭＳ部隊を８０００機揃えてこの様か、まだ兵士の練度は低い。
兵士全体のＭＳへの習熟が、課題になることは今回で十分分かった。

加えて前衛も少ない。
グフの生産を少量にしたのは、間違いだったかもしれない）

カイがそう考えているとＭＳの準備が整い、カイは戦艦の一室から出て、ＭＳ収納庫へと進む。

今回は急遽カイが戦艦を生産し、ＭＳを大量に戦艦に搭載した。

この戦艦の操作方法はＭＳとおなじく、簡単にできるようになっている。

しかし、訓練された船員は正規の戦艦に乗っているので、艦砲射撃には期待できない。

カイは自らの専用機である、真紅に黒い模様が施されたゲルググに搭乗する。

「カイ機出撃する、追従しろ」

カイの後ろには、最新式アンドロイド十体がガルバルディαに搭乗し、追従する。ガルバルディα十機は赤から緑色に塗装されているが、性能は変わらない。

ガルバルディαは第一世代モビルスーツの中では、最強クラスの機体だ。

カイもガルバルディαに専用機を移そうか迷ったが、凄まじいポイントを使って改造したゲルググを使わないのは、余りにも勿体ないので断念した。

海上を飛ぶ１１機の最新鋭ＭＳ達。

推進剤が無くなることもカイの能力故になく、まもなく戦場に介入することだろう。

そして、舞台はまた戦場へと移る。

「下がれ、のろのろしてると、ＢＥＴＡに尻を食い千切られるぞ」

前衛部隊はクラッカーをＢＥＴＡ達に一斉に投げつけると、ホバー移動で高速で後退していく。
これで新兵器が大して有効ではなかったら、ただ前線が下がっただけになってしまうからだ。

下がり過ぎると、光線級が対レーザーフィールドの膜を通過する。

そうなったら、ジ・エンドだ。

だが、兵士の期待は良い方向に裏切られる事になりそうだ。

地面が揺れる。

そして、突然ＭＳ部隊の後ろから、巨大な生物が歩いているような音が聞こえてきた。

兵士達の中には、もしや後ろから要塞級が現れたのかと思い、余裕が無いにも関わらず、ＭＳを振り向かせる者さえいた。

後ろから現れたのは、巨大モビルアーマーであるビグ・ザム。

ザクの三倍近い大きさを誇るその機体は、一体だけでなく合計三体出撃していた。

ただし、装備された武器は全て実弾兵器。

対レーザーフィールドで、阻まれる武装は一つも装備していない。

そして、本来は３６０度攻撃が可能だったが、カイの改造によって前方攻撃に特化かさせられた。

メガ粒子砲こそ撃てないが、火力は本物。

砲門は前方に集中し、通常より5基多い３３基の砲門がビグ・ザムには装備されている。

ビグ・ザムは、莫大な電気エネルギーを消費しその３３の砲門全てから超電磁銃を放つ事ができる。

実弾兵器だが、レーザー砲にも劣らない破壊力が期待できるだろう。

そして、三機全てのビグ・ザムから電気が迸る。

次の瞬間、９９発の稲妻がＢＥＴＡに向かって、横向きに突き進む。弾は突撃級の5身体を貫通し、戦車級の５０身体を通過、要撃級３０体の身体も問題なく貫通していく、そして何かを守るかのように並ぶ要撃級の身体も突破した。

そして、遂に光線級に要塞級の身体から脱出した弾は、飛来する。

レーザー級を弾は串刺しにし、弾は遥か彼方に飛んで行った。

一発の弾でその威力だ。

それが同時に９９発放たれたのだ。

数千匹のＢＥＴＡが、一瞬で三機の機体によって一掃された。

再度、超電磁銃を放つのには少し時間が掛かるが、ビグ・ザムのパイロットは急いでビグ・ザムに次弾を装填させ、エネルギーをチャージさせ始めた。

勝てるのではないか、いやこの機体が仲間なら勝てる！

台湾兵士はそう感じ、士気は大幅に上昇する。

ビグ・ザムの破壊力とザクマシンガン、ジャイアント・バズによる援護射撃より、瓦解しかけていた戦場は、何とか持ち直し始めた。

兵士達はこれならば、援軍が来るまで時間が稼げると確信し、雰囲気も悪くない。

しかし、それはほんの少しの間だけの事だった。

突然、対レーザーフィールドの目前に、地中から要塞級が出現した。

ＢＥＴＡとの戦いの歴史は浅く、地中からの襲撃等前線国家しか今のところ知らない。

台湾部隊もＢＥＴＡの間引き活動を行うが、ＢＥＴＡが地中から攻めてくるのは台湾軍にとって予想外の事態だった。

しかも、出現したのは要塞級。

加えて出現した場所も悪く、対レーザーフィールドの目の前だ。

ＭＳとビグ・ザムは慌て、要塞級の大群に一斉に射撃を加えていく。

しかし、要塞級からはその前に多数のＢＥＴＡが放出され、その中にはレーザー種も混じっている。

「光線級が対レーザーフィールドの内側に侵入した、優先的に片付けるぞ」

そう言った瞬間に、そう言った兵士のザクの機体を、光線が貫いた。

改修型のＭＳ以外は政府の予算の都合上、対レーザーコーティングを施されていない。

対レーザーフィールドがあるので、今まではそれでも問題無かった。

だが、それは最早過去の事だ。

「ビグ・ザムを守れ！要撃級がそっちに行ったぞ！」

直ぐ様ビグ・ザムの周りにザクが集まり、ヒートサーベルを構えた。

要撃級はビグ・ザムを脅威と感じたのか、優先的に攻撃を仕掛けてくる。

しかも、その間にも敵の大群は進み続けているのだ。

対レーザーフィールドの内側のＢＥＴＡを倒しながら、外側も相手

にしなければならない。

光線級はビグ・ザムに光線の集中放火を浴びせたが、ビグ・ザムのＩフィールドにより、ＢＥＴＡ光線は通用しない。

だが、打撃は利くのだ。

突撃級がビグ・ザムを守るザク達を弾き飛ばし、要撃級が道を切り開いていく。

そしてついに、ビグ・ザムの一機が地に伏した。

大量の戦車級がその機体に張り付き、装甲を噛み千切っていく。

そして、要撃級がビグ・ザムの足を破壊し移動不能に。

パイロットはビグ・ザムの中で死ぬのを待つしかなく、恐怖の余り機体から脱出した。

そして、脱出した兵士を待ち受けるのは、戦車級のＢＥＴＡ達。

脱出した兵士は、断末魔の叫びを上げることなく、ＢＥＴＡによっ

て補食された。

「ぐっ、ビグ・ザム一機がやられた！もう一機もヤバイぞ」

兵士はの言葉を聞き、応援に行きたいと思うが、自分もＢＥＴＡの相手で手一杯。

前進を進めるＢＥＴＡ達の中にも、徐々に対レーザーフィールドの内部に入り込むＢＥＴＡが出始め、辺りに光線級のレーザーが飛び交い続ける。

兵士の中には、補給と言って要塞に逃げ出す者も出始めた。

後方にいたガンタンクは、機動力が欠如しているので、前衛がいなければ無防備となる。

ガンタンクによじ登り、装甲に噛みつく戦車級。

小さい戦車級には、ガンタンクの攻撃は当てられず、しかも身体に引っ付かれたら、もうそれで助かる見込みはほとんど無くなる。

「カイ少将だ、応援に来た」

その時、カイの声が全てのＭＳに乗る兵士に届き、兵士達の瞳に希望が宿った。

兵士達は、数千のＭＳ部隊を期待し、カイ達の方向を向く。

しかし、応援のＭＳはたった１１機。

兵士達は絶望し、見捨てられたのかと思い始める者もいた。

「選り取り見取だが、先ずは大きい奴等を片付けよう」

カイはそう言うと、ゲルググを高速でホーバー移動させ、要塞級へと向かって行く。

通り抜ける瞬間に、近くのＢＥＴＡをヒートクレイモアでカイは二つに断ち、改造したゲルググの力を発揮させていく。

要塞級に近づくカイを危険と判断したのか、重光線級はカイにレーザーの照準を向ける。

カイはそれを見ても曲がる事なく真っ直ぐ進み、正面にいた要撃級を切り裂きながら、ゲルググのスラスターを放出させた。

重光線級はエネルギーを溜める。

だが、カイはそのエネルギーが放たれる前に、重光線級に刃を突き立てた。

「一般機の常識を、この機体にも期待するんじゃない。」

カイはそう言うと、触手による要塞級の迎撃を避け、要塞級を熔断した。

その他の要塞級もガルバルディαが片付けていたが、最早戦線の維持は不可能に近い。

カイの奮戦虚しく、少しずつＭＳ部隊は後退していく。

カイのゲルググが片手のヒートクレイモアで要撃級を切り裂き、ザクマシンガン改で光線級を撃ち抜いていく。

それでも後ろに、要塞が見えてきてしまった。

「援軍が来るまで後何分だ！？」

「後、１０分程です」

カイの言葉に直ぐに側近が答え、カイは切り札の発動を決意する。

「3分間だけ、本気を出させてもらおうか」

カイの言葉と共に、ゲルググの内部から機械の機動音が鳴り、真紅のゲルググに施された黒い模様が、赤く輝き始める。

そして、ゲルググの周囲に陽炎のような、空気の揺らぎが発生。

次の瞬間、ゲルググは残像が見えるかと思う程の速さを発揮し始めた。

赤い光を放ちながら、一瞬でカイの乗るゲルググはＢＥＴＡを次々と八つ裂きにしていく。

そして、カイの鬼気迫る猛攻と真紅のゲルググの性能により、一時的にＢＥＴＡの進行を押しとどめるに成功した。

速すぎてあらゆる攻撃は当たらず、ゲルググが狙った相手は必ず穴だらけになるかもしくは両断され、大量の体液が周りに撒き散らされていく。

（遅い、全ての敵が……いや、味方のＭＳすらも遅いと感じる）

カイの鬼神のような働きに兵士達は盛り返し、援軍はその後ようやく到着した。

カイの生産した巨大戦艦と台湾の戦艦から、ＭＳは次々と出撃して

行く。

対レーザーコーティングをされた機体はスラスターで空中を飛び先行し、対レーザーコーティングの施されていない機体は戦艦が陸に近付くまで出撃を待つ。

援軍の到来に更に兵士は士気を上げ、ＭＳ部隊は順調にＢＥＴＡの軍を押し返していく。

カイは三分後、直ぐに前線から離れ、ポイントを消費して機体を修理　した。

（ふぅ、何とかなったが危ない所だった。どうやらＢＥＴＡを甘く見すぎていたらしい）

ゲルググの身体を冷却しながら、カイはそう思い新たな対策を練る事を決意する。

そして、カイは再度出撃し、続々と増えていく台湾のＭＳ部隊と共にＢＥＴＡの駆逐を進める。

台湾独自の軍事兵器により、ＢＥＴＡの大群を撃退する事に成功した。

そしてこの戦いにより、中華民国の名は世界中に広まる事となる。

終戦　赤い刃（後書き）

カイがやらかしてしまった。
ゲルググについての言い訳は次回に。
閲覧ありがとうございましたm（__）m

今はただ耐え、反撃の時を待つ（前書き）

前話の終戦　赤い刃　は大幅に修正させていただきますた。
今回はそれほど進展はないかもしれません。

今はただ耐え、反撃の時を待つ

前回のＢＥＴＡとの大規模戦闘で、カイはＢＥＴＡの危険性を再確認した。

報告では、ＢＥＴＡとの交戦中に弾丸の補充という名目で基地に逃げ帰った兵士が、何十人もいると書かれている。

（絶対に命令が出るまで逃亡せず、アンドロイドよりコストが低いＣＰＵは予想通り役に立った。
更に積極的に生産いく事にしよう）

カイはそう考える。今回のＣＰＵの活躍を見たらそう思うのは当然だろう。

カイはむしろ兵士全てをＣＰＵにすればいいんじゃないかとすら考えていた。

しかし、レベルの高いＣＰＵはそれに応じてポイント消費も高い。

レベルの低いＣＰＵは、破壊の可能性が非常に高いので、普通のザク？くらいにしか搭載できない。

兵士の練度が上がれば、高レベルに匹敵する者も出てくるし、もし

かしたら天才パイロットが居る可能性もある。

カイは戦いで活躍したと報告があった将来有望な兵士達と戦術機に乗った経験のある兵士に、緑色のガルバルディαを配備した。

戦術機とＭＳは操作方法が全く違うのだが、それでも戦術機のパイロットは、ＭＳを上手く乗りこなす事ができる者が多いようだ。

（技術力の上昇も遅くなってきたが、現在Ｌｖ２５。ジオングの開発が可能になった。そろそろ、Ｚに時代は移っていくか）

Ｚに移ると言うことは、そろそろハイザックが開発可能になると言うことだ。

ハイザックが配備され始めれば戦力も上昇し、ＢＥＴＡの被害をより少なくできる。

「兵士達には、ＭＳで積極的にＢＥＴＡの間引き作戦を行わせろ。ＢＥＴＡとの戦いの経験を積ませ、ＭＳの操作訓練も行わせたい。そして後は、兵士のＭＳ操縦の適正を調べてくれ」

カイがそう言うと、アンドロイドが敬礼して部屋を出て行く。

カイはそれを確認すると、机に置かれた書類に目を通した。

「やはり対レーザーフィールドだけでは、重光線級の攻撃を完全に防御するのは無理か。重光線級の攻撃が幾つか、対レーザーフィールドを貫通している」

カイはそう呟くと、中国にある台湾軍の要塞を思い出す。

ＭＳの収納や修理、弾の補給が行えるようにはなっていたが、要塞はカイが設置した物ではなく、元々中国の軍が建設した施設を利用して台湾軍が使っているらしい。

その為か、要塞の防御力はさほど高くない。

全線を守るのがそんな要塞では、かなり不安だ。

カイはジャブロー建設の他に、新たな要塞の建設も計画する。

今回の戦闘で、ポイントはかなり稼ぐ事が出来たのだ。

結構な額の出費になるが、それはいつか台湾を守る為に役に立つだろう。

そして、一通りカイは今後の予定を確認すると、次は趣味に時間を

費やす事にした。

カイはゲルググに乗って、台湾近海に建設された島へと向かう。

元々カイはゲームを楽しみに来ているのであって、淡々とした仕事をしに来た訳ではないのだ。

ＭＳの開発も面白いが、今回カイは自費でアメリカから購入した、第一世代戦術機を観賞する事にしていた。

現代の地球の主力兵器であるファントムは、確かに美しいとカイは感じる。

カイのコレクションが展示されている海上基地には、ザクやズゴック等今までカイが開発してきたＭＳが全て展示されているが、全て未使用でありカイはずっと観賞用に展示しておくつもりだ。

最近では、ジオング等も展示されたが、戦術機がここに入るのは初めてだ。

「うん、やはり戦術機もなかなか良い物だ。
観賞用に集めて、ＭＳと共に展示する事にしよう」

カイはそう決めたが、戦術機をコレクションするのはなかなか難し

いかもしれない。
現在、第二世代戦術機が開発されているが、どの国の機体も最重要機密とされている。
ある程度第2世代が普及するまで、手に入れるのは不可能に近い。
（台湾の政府以外の国にもアンドロイドを侵入させているが、他国ではまだ浸透率が低い。
戦術機を横流しさせるのは厳しいそうだな）
カイはそう思いながらＭＳを収納させるためにかなり広く高く建設されている展示室を出ると、今度は外に用意されたもう一機のファントムを眺めた。
この機体も新品だがこれは観賞用ではなく、かと言って実戦で使う気もカイにはない。
そして、カイは戦術機に乗り、機体を作動させる。
戦術機は剣を振るい、用意された銃を的に向かって放つ。
（ＭＳとは全く操縦方法が違うな。
だが、だからこそ面白い）

カイはしばらくの間戦術機に乗って楽しむと、機体から降りる。

「面白いし、見た目も良いが弱いのが難点だな」

カイはそう言うと、アンドロイド達に一度しか使っていないファントムの解体を命令した。

（このファントムを俺が今から改造し、最新機以上の力が出せるようにしようじゃないか）

カイはファントムの身体の部品と全く同じ形をした、部品をガンダリウム合金を使って開発し、生産していく。

（核融合炉とホバーの取り付けは確実に行い、後は適当に色加えていくか。）

カイはその後も悪ノリし、ゲルググに付けた物の劣化版を機体に組み込んでいく。

その装置はゲルググに設置されており、わざと核融合炉を破壊し膨大なエネルギーを暴走させ、一時的に機体の１，５倍程機動力を上昇させるという機能がある。

そして、その装置は紛れもなく失敗策だ。

核融合炉を暴走させた三分後、ＭＳの機体は徐々に崩壊し始める。

そして、五分後には機体は爆発、跡形もなく吹き飛びパイロットも機体も消し飛んでしまう。

しかも、装置は核融合炉を破壊するので、途中機能の停止は行えない。

通常なら、危険過ぎて使えもしない機能だ。

しかし、それは通常の話。

カイはポイントを消費する事で、ＭＳの修理を行える。

三分機体を動かしたら、ポイントを使って機体を　修復　すれば良い。

機体に熱が残るので、連続使用はおこなえないが、熱はカイのＭＳに施された黒い模様のような箇所から、逃げていくように設計されている。

装置を機動させると、黒い模様が赤く光るのは、外に逃がして行く熱の温度が余りにも高い為。

ＭＳから立ち上る揺らぎも、熱による物だ。

カイはその速い機動によって、赤い彗星とか真紅の稲妻とかの二つ名を、頭の片隅で考えていたが、カイの二つ名はカイが理想としている物ではなかった。

なので、カイは二つ名等なかったのだと思い、全てを忘れる事にした。

「……完成。色以外は完全にファントムだが、中身は全く違う戦術機のようなＭＳができた」

カイは完成品を見ると満足し、今日は帰る事にした。

（第三世代ができたら、これと戦わせよう）

カイはそう思い、第一世代のファントムを倉庫に収納した。

次にカイはＭＳの生産施設へと向かう。

現在ＭＳの生産施設は、大規模なＢＥＴＡ戦により破壊されたＭＳの機数を取り戻そうと、連日フル稼働している。

ここは言うなれば、台湾の心臓部だ。

台湾の海上で現在ＭＳの生産工場の建設が進められているが、現在世界でＭＳ工場はここにしか無い。

更に地下は巨大な研究施設となっている。

その為、前のＢＥＴＡとの大規模戦闘もあり、この工場は世界中から注目されるようになってしまった。

各国のスパイが工場内に入り込もうとするが、工場内にいる者達の大半はアンドロイドであり、スパイは速やかに排除される。

しかも、工場内には蚊型の偵察機と、蟻型の偵察機が徘徊している。

スパイが侵入したら、直ぐに情報は工場内のアンドロイドに伝わるだろう。

だが、それでもなかなか安心出来ないので、この基地では通常機器では通信できず、アンドロイドのネットワークのみで情報を知れるようにカイは改造した。

「この工場の防衛の為に、ザク改修型３０機とドム改修型３０機が配備されています。

例え戦術機が攻めてきても、迎撃する事が可能です」

カイを案内している研究所の所長は、工場を生産したカイに工場の防衛機能を説明する。

可笑しな光景だが、カイは自分が生産した施設を完全に把握している訳ではないので、自分が生産した工場を見学していても楽しむ事はできた。

次に工場内にあるエレベーターにキーカードを挿し込み、カイと研究所の所長は地下へと降りて行く。

地下には台湾や、中国から脱出してきた研究者達が日夜研究に励んでおり、実はその一人一人には裏切らないか見張る為の小型の虫が付いている。

しかし、研究所の所長もそんな事は知らない。

知っているのは、カイだけだ。

「ヒートランスは完成したか？」

カイが研究所を見学しながら、所長に向かってそう尋ねる。

ＢＥＴＡ戦でヒートサーベルだけでは、前衛が持たないと感じていたカイは、研究所でヒートランスを作らせていた。

ちなみにヒートクレイモアも、この研究所で開発された物だ。
ＭＳの技術と戦術機の技術の融合。
それを果たす為に作られた研究所だが、こういう実践的な兵器も開発させ、その対価としてかなりの額の金をＭＳ研究所に支払う。
研究費用は台湾政府も多少払っているが、ほとんどはカイの自費から支払われている。
今や台湾政府はカイに全く頭が上がらず、カイの要求はよほど無理ではない限り承諾してくれる。

「ヒートランスは完成していますが、機動テストはまだ行われていません。
近日機動テストが行われ、結果が良好なら納入したいと思います」
カイはその話を聞くと頷き、ヒートランスの配備によって近接戦闘が少しは楽になるだろうと思った。

「じゃあ、例のＭＳはできそうか？」
カイが聞くと研究所の所長は首を横に振り、恐る恐る口を開く。
「例のＭＳですが、機動テストも含めるとまだ後１ヶ月程掛かります。

そちらの都合も承知していますが、やはり直ぐに出来る物ではありません」

所長はカイがこの言葉を聞いて落胆するかと思っていたが、予想に反してカイは平然とした態度のままだった。

「そうか、ならば予定通り小出しにしていく事にするか……わかった、ありがとう。
ＭＳの件はその日程で作ってくれ」

カイはそう言うと研究施設の装置を見学し始め、所長はホッと安堵の息を吐いた。

今回の問題は、ＢＥＴＡとＭＳの戦いを何処からか見ていた、各国による台湾への要求が原因だ。

超電磁銃やＭＳの情報を提供するよう国連は台湾に求め、その後ろでアメリカが台湾に圧力をかけてきた。

台湾等所詮まだ、小さな島国島国でしかない。

超大国にはとても対抗する事等できない。

そして万が一反抗したら、台湾は世界から孤立し、下手したらアメリカから核爆弾を撃ち込まれる可能もある。

今は我慢して、カイは超電磁銃を改造し、レアメタルを大量に使う超電磁銃を開発すると国連(アメリカ)に一つ提供する事にした。

レアメタルを大量に使うのは、カイの意趣返しの為だ。

最も他の部品でも作れるが、この世界にはない合金を使う事になる。

どのみち幾らアメリカでも、レアメタルを大量に使う超電磁銃は量産できないだろうと思い、カイは渋々ながら超電磁銃を提供した。

そして超電磁銃は流石に特許を取ったので、かなりの額が台湾に流れ込み、台湾の経済は成長していく。

カイはそれなりに長い間研究所を見て周り、レーザー兵器の分析を進めている場所を見学すると帰って行った。

(後は兵士の練度が上がるまで開発しながら、コレの介入を政府と話し合う事にするか)

そう思うカイの前には、あらゆる国にばら蒔かれた偵察機からの集めた情報が写した出された画面が、空中に出現する。

その画面には、通常ならカイが知る筈もないハイヴ攻略作戦という文字が映し出されていた。

(この作戦は見逃せない、まだどのハイヴを攻略するかは未定のよ

うだが、ハイヴの攻略情報はＣＰＵを搭載したＭＳ１０００機よりも重要だ）

カイはこの作戦を詳しく偵察機に見張らせるよう、アンドロイドに命令する。

ＢＥＴＡの侵略を止めるため、オリジナルハイヴを狙う可能もある。

どのハイヴを攻略するにしてもカイは参加しハイヴのデータを手に入れたいと思い、自らもそれに備えて動き始める事にした。

今はただ耐え、反撃の時を待つ（後書き）

ＭＳは大丈夫でしたが、超電磁銃はアメリカに奪われました。

レーザー兵器もそろそろ出始めますが、各国のクレクレ攻撃への対応策に困りそうです。

旅立ち（前書き）

よろしくお願いします

旅立ち

ハイヴ攻略作戦に向けて準備をカイは進めていたが、ハイヴ攻略作戦が始まるよりも前に夏休みが終了する可能性が高いと判断する。

よって、カイは一度ログアウトし、叔父に今までプレイしたデータを保存してもらい休日等に少しずつ進めていこうと思った。

カイはその為に一度ログアウトを実行する。

しかし、ゲームの画面に『ログアウト機能の不具合により、現在ログアウト出来ません。
エンディング終了後の強制終了機能を使うか、外部からのゲームの停止ををお待ち下さい。』

という文が、画面に流れた。

（ログアウト不可？まぁ、時間がたったらどうせオジキがゲームを終了させるか。まぁ、もし不具合に俺がプレイ中に気づかず、夏休みの終わりに気づいて修理し始めたら、もっと長くゲームができるかもしれないな）

カイはそう思うと、それから他の事を考え始める。

（レーザー兵器の実験は極秘で基地内で行われているが、問題はＢＥＴＡがどれ程の時間で対応するかだな）

カイは戦闘機を無力化した情報を思いだしながら、どれくらいの期間レーザー兵器が有効か考える。

恐らくＢＥＴＡは大量にＢＥＴＡを排除する兵器には、優先的に対応してくる。

実弾兵器等に対応してこないのは良いが、敵にはレーザー級がいるのだ。

レーザーを無力化するＢＥＴＡが出てきても、不思議ではない。

（中国でレーザー兵器の極秘テストを行う時は、レーザーで大量に敵を倒すのは止めた方がいいな）

カイがそう考えていると、アンドロイドが書類を持ってカイの方へ歩いて来た。

「ＭＳの操縦に適正がある者達をリストアップしました」

アンドロイドにそう言われながらカイは書類に目を通し、兵士の名前が書かれた箇所に赤ペンで何度かマークを付けていく。

「マークを付けた兵士達にＭＳの訓練を受けさせ、徹底的に鍛え上げろ。

教官は最新式のアンドロイドを幾人か派遣してくれ」
カイの言葉にアンドロイドは了承し、書類を受け取ると去って行った。

その頃、台湾軍とＢＥＴＡの軍勢の決戦の映像はアメリカでも極秘で入手され、アメリカの高官達もこの映像を見て驚愕していた。

「機体の性能も第二世代……いや、下手をすればそれ以上、是非ともアメリカに欲しい機体ですな。
特にあの巨砲は良い、推定３６０ｍｍのあのバズーカはかなりの威力があるらしいと報告がありますし」

一人の者がそう言うと、隣に座る男が顔をしかめる。

「イエロー・モンキーの開発した機体に搭乗する等、正気の沙汰ではありません。所詮ちっぽけな極東の島国が開発した物、今回は運が良かったかもしれないが、すぐに故障するのが目に見えています」
男がそう言うと、席のあちこちから賛成の声が上がる、賛成の声はほとんど全て男と同じ派閥に属している。
やはりアメリカでは、人種差別が激しいようだ。

「だからこそです。イエロー・モンキー達もＢＥＴＡに破壊される前に私達が技術を有効活用してあげれば本望でしょう」

男が自信満々にそう言い切ると、周囲にいる男の仲間が賛成し始めた。

「ですが、献上（奪った）された超電磁銃はレアメタルを大量に使う上、大型で戦艦にしか使えません。
ＭＳも所詮数だけだ。
ＭＳを奪うのはＭＳの発展をしばらく見守り、最新型を見てからにしないか？」

男がそう言うと、あちこちから賛成と反対の意見が飛び交う。

台湾等、ここにいる人々にとっては所詮はちっぽけなイエロー・モンキーの国の一つでしかない。

その国が何かを開発したならば、アメリカに献上するのは当然の事だと思っている。

「最も惜しまれるのは、戦いの前半で砲撃に偵察機が巻き込まれ、最後まで戦いを見る事ができなかった所ですね」

カイが対レーザーフィールドがバレないように、偵察機を破壊させたのだが、高官達はそんな事は知らない。

「何、衛星からの映像勝敗はわかったし、あの巨大なＭＳは見えたあの巨大なＭＳとやらの超電磁銃と台湾全てのＭＳとやらを集めて勝ったのだろう」

高官の発言は割りと的を得ていたし、あの量の兵器をどうやって台湾は製造しているのか疑問が残ったが、高官達はとりあえずそれで納得する事にしていた。

「そもそも、イエローモンキー共は何故大人しく技術を献上しないのだ、そもそも全ての国はアメリカがあってこそ……」

小型偵察機でこの光景を眺めていたカイは苦々しい表情をしていたが、現状確かにアメリカに圧力を掛けられたら何か技術を提供せざるを得ない。

会議の光景が見られているとは知らず、会議に参加した政府の高官や資本家達は台湾を罵倒し、どうやって技術を巻き上げるかを話し合っていた。

（ＭＳについては注目されているが、戦術機の開発を止めてまでＭＳに力を入れようとする覚悟がある国は流石にないか。
対レーザーフィールドは見られていないから超電磁銃だけで、アメリカはとりあえず満足したようだな）

カイはそう思うと一先ず安心し、映像は記録を続けさせながら別の映像にチャンネルを変えた。

しばらくたつと、ようやくＭＳの数が目標数を越え、技術力もＬｖ３０に到達した。

そして、カイはアンドロイドによってまとめられた、兵士達からのＭＳへの要望が書かれた書類を眺める。

あのＢＥＴＡの大進攻から三年も経過すれば、台湾軍兵士のＭＳ操作技術もかなりの向上を見せ、ザク改修型を手足のように扱えるようになってきた。

ドムもザクもほとんどの兵士が改修型に移行し、一部のエースからは新たなＭＳの開発も希望されている。

カイはザクカスタムとドムの改修機であるドワッジをＭＳ研究所で発表させ、一部のエースにはパーソナルカラーを機体に塗装する許可をした。

ザクカスタムは一部のエースに配備する予定で、頭部にアンテナブレードが付いている以外は、通常機と見た目が変わらない。

しかし、ＭＳ研究所はザクカスタムの機動力がザク改修型の機動力

の1，3倍になっていると発表し、配備される予定となったエースパイロット達は今か今かとザクカスタムを待ちわびた。

一部でいい加減デザインを変更しろと言う声もあるが、三年でそう新しい機体は開発出来ないという意見とドム、ザクの愛好家によって封殺された。

エースパイロットにとっては新しいＭＳも嬉しいが、パーソナルカラーを機体に塗装出来ると聞いて狂喜乱舞していた。

しかし、中にはドワッジの色をドムと同じにしてくれ、というドムの愛好家等の姿も見られる。

（ザクの人気はわかるが、やけにドムが人気なんだよな。
やはり巨砲はロマンを感じるのだろうか）

カイはそう感じて、他のＭＳを開発してもドムから乗り換えないとか言われたら困るなと思い、後一年ほどしたら新たな機体を発表しようと思った。

そして、新たな機体の配備と並行してカイは遂にビーム兵器の運用テストを中国で行わせる事に決める。

カイも自ら中国へ向かい、ＭＳ部隊の指揮権を一端軍部に潜ませて

いたアンドロイドの大佐に任せる事にした。
本来の武器であるビームライフルを持ったカイのゲルググが地上に降り、続けて実験部隊のガルバルディαも地上に到着する。

ガルバルディαはいずれ量産を開始する予定ではあるが、今はまだ極端に数が少ない。
ガルバルディαに乗っている兵士達は全員アンドロイドにカイが訓練させ、エースパイロット級の実力を得た兵士達だ。

一応カイの直属となってはいるが、カイは一人で戦う事を好む。
実践では活躍するだろうが、カイと共に背中を預け合って戦う事はないかもしれない。

「こちら血道部隊、敵を捕捉しました実験を開始します」
そう部隊の者が言うと、ガルバルディαはビームライフルで前方のＢＥＴＡに向けてビームライフルを発射する。
光線は命中、貫通し数体のＢＥＴＡを纏めて殺していく。
「凄い、まるでビグ・ザムの超電磁銃のような威力だ。しかもそれが携帯できるなんて……」
血道部隊の兵士達はビームライフルの威力に歓喜し、ＢＥＴＡを次

々と撃ち殺していく。

結局ＢＥＴＡの群れを実験部隊だけで倒す事に成功したが、ＢＥＴＡが光線を無効化するような事はなかった。

「やはり、大量殺害兵器には対応するが、群れを倒す程度の兵器にすぐに対応するという訳ではないか。
しかし、ハイヴ攻略でビーム兵器を使うとなると、いずれ効かなくのは確実か」

カイもビームライフルでＢＥＴＡを撃ち抜き、その威力に興奮していたが頭だけは冷静にそう判断し、つい声を洩らした。

（ハイヴ攻略用にメガ粒子砲を装備したビグ・ザムと超電磁銃を装備したビグ・ザムが量産されているし、これのお披露目はやはりハイヴ攻略戦になるな）

カイはそう思うと同時に、そろそろ自分の操作の腕前を上昇させようと思い始める。

反射速度や身体能力、頭の回転速度上昇や攻撃察知等をポイントで強化しているが、ＭＳの腕前を強化する事はできない。

アンドロイドの大佐を台湾のＭＳ部隊指令代理に置く事が出来、自分は自由に動けるようになった。

丁度中国に来ているのだ、オジキによって作り出された偽物かもしれないが、故郷の日本を訪ねるのもいいかもしれない。

カイはそう思うと実験部隊を台湾に帰らせ、久しぶりに自分一人だけになった。

ゲルググから降り、崖の上からカイは中国の地を眺める。

激しい戦いによって辺りは荒れ果てているが、最近建設された新たな要塞によって、ＢＥＴＡによる進攻は妨げられている。

周囲の土には木の芽が生え、自然の強さを垣間見る事ができた。

（改めてここがゲームの世界なのか、わからなくなってきた気がするな。

いくらオジキのゲームでも、ここまで自然の強さを表現できるのか？

人間の感情もそうだ、大国は当たり前かもしれないが傲慢だし、兵士達は必死でＢＥＴＡから祖国を守ろうと戦っている。

しかも、俺の体もきちんと成長して、身長も高くなってる。

余りに……いや、そんな筈はない）

カイは首を振って考えるのを止めると、地面に寝転ぶ。

空は青いが前の世界以上に、この空は汚染されているのだろう。

しかし、カイは前の世界と変わりない空を見て少しだけ心が穏やかになった気がして、再び起き上がる。

「暫くの間はよろしく頼むぞ」

カイは自らのゲルググに声をかけ、機体を撫でると搭乗し、赤いＭＳは中国の空を飛翔した。

旅立ち（後書き）

閲覧ありがとうございましたm（__）m

放浪し刃は赤く染まる（前書き）

原作には主人公の今の状況なら、楽に介入できそうです。
しかし、白銀の周りのヒロイン達は救済した方がいいんですかね？
白銀２周目にしたいので、純夏が助からないかもしれないんですが、
意見があればもしかしたら変わるかもしれません。
まりも先生は二回あの死に方は……反対多数でなければ助けたい。

放浪し刃は赤く染まる

カイのゲルググは中国の地を一陣の風の如く高速で移動していた。

ゲルググのレーダーには大量の赤い点が表示され、ＢＥＴＡが前方に多数存在する事を示している。

更に戦術機を示す白い点もレーダーに映るが、ＢＥＴＡに呑み込まれかけているので全滅するのも時間の問題だろう。

「こちら台湾軍ＭＳ部隊、援護させて頂く」

一機だけでは怪しまれる為、カイはザクカスタムを五機程引き連れているが全てＣＰＵが搭載されているだけで、簡単な受け答えしかできない。

実質会話ができるのはこの部隊では、カイだけだ。

「ありがたい、救援に感謝する」

カイはその言葉を聞きながら、全速力でゲルググをＢＥＴＡに突貫させる。

身に付けた新型武装であるトランフォームウェポンを起動し、カイは武器をヒートハルバートに変形させる。

突撃級の攻撃に対してゲルググはヒートハルバートを振るい、突撃級のＢＥＴＡの硬い装甲を溶断する。

続いて要撃級の硬い腕が、突撃級を乗り越えて現れた要撃級のＢＥＴＡによって振るわれる。

頭を敵は正確に狙ってきたがカイは回避し、もう片方の腕に持つザクマシンガン改で要撃級を蜂の巣にする。

そして、その場からゲルググは素早くホバー移動し、武器をフライパンのように丸く平たい形にすると、大量に群れる戦車級をそれでプレスして焼き潰した。

「変形兵器は強度が心配だったが、改善されていたか」

カイは以前使っていた、伸びるヒートサーベルを思い出しながらそう思うと、ザクマシンガン改でＢＥＴＡを片付けながら、突撃してきたＢＥＴＡをヒートクレイモアに変形させた武器で焼き切っていく。

すると、突然ＢＥＴＡの群れが二つに分かれる。

「ちっ、光線級か！」

カイはそう言うと武器を素早くヒートホークに変形させ、ゲルググにヒートホークを振るわせ始める。

ゲルググの直接上にいるのは最悪な事にチャージが完了した重光線級。

耐レーザーコーティングで攻撃は防げるが、機体が吹き飛ばされて倒れたらＢＥＴＡの格好の的になるのは明白だ。

重光線級の強力無比な光線は、真っ直ぐカイのゲルググに飛来する。

中国の兵士もカイの奮戦を見ていたが、流石にあの攻撃は防げないと思っていた。

しかし、結果は中国の戦術機部隊の兵士達を驚愕させるには、十分過ぎる結果が出た。

重光線級のレーザーとカイの振るうヒートホークが激突する。

レーザーとヒートホークの間に一瞬スパークが走り、ゲルググはヒートホークを振り切った。

すると、レーザーはヒートホークに弾かれ、あらぬ方向へと飛んでいった。

つまりカイは重光線級のレーザーを近接武器で弾いたのだ。

中国の戦術機部隊の兵士の中には今見た光景が、現実だとは信じられない者もいた。

カイのゲルググはそのまま光線級の群れに狙いを定め、ザクマシンガンを連射する。

ＢＥＴＡ達は左右に分かれているので、光線級を守るＢＥＴＡは一匹もいない。

その全てのレーザー級はカイによって撃ち抜かれ、中国軍は光線級の脅威から一時的に解放された。

「数が随分多い、なかなか面倒くさいな」

カイはそう言うとザクマシンガン改をしまい、もう片方の手にもトランフォームウェポンを装備する。

二本の武器が巨大なヒートグレートソードに変形、近づくＢＥＴＡ

を纏めて溶断していく。

「制限解除、ブラッドフォームに移行しようか」

カイのゲルググの黒い模様が全て赤く光る。

ゲルググの周囲が熱によって揺らぎ始めると同時に、急激にゲルググの機動力が増加する。

常人には耐えられないようなＧがカイに掛かるが、カイは苦痛に思うことなくグレートソードを振るっていく。

途中要塞級に降下された重光線級がカイのゲルググに向かって光線を放ってきたが、ゲルググの赤い残像しか捉える事ができない。

羊の群れを食い殺す獅子のようにゲルググは暴れ、結果中国軍ＭＳ部隊の兵士達がが呆然した表情で見ている内に、全てのＢＥＴＡがゲルググとザクによって片付けられた。

カイは直ぐにポイントを消費してゲルググを修理すると、機体を冷却させていく。

戦術機部隊の兵士達の動きはその後もしばらく停止していたが、ようやくカイの機体に中国軍の戦術機から通信が掛かってきた。

「応答を願います。こちら統一中華戦線第８１中隊隊長　趙　海波少佐であります。
そちらの所属と部隊名を教えていただけますか？」

海波少佐は目の前の光景が未だ信じられずにいたが、目の前の機体がどこの所属なのかは大体予想がついていた。
何故なら中国にも台湾のＭＳが応援に来る事があるので、ザクやドムは目撃されている。

しかし、技術漏洩を阻止する為に改修していないドムやザクしか、中国には派遣していないのだ。

中国軍がザクカスタムも含めた、目の前の機体達の機動力に驚くのも無理はない。

（特にあの赤いザク……赤く光ったと思ったら急激に機動力を上昇させたぞ）

海波少佐の目には赤いザク……ゲルググが、怪物であるかのように映る。

実はカイの新しい機体が現在開発されていて、その機体の機動力はゲルググを遥かに凌ぐのだが、勿論海波少佐は知らない。

よって、目の前の機体が台湾の最新鋭の機体だと予想し、自分の推論に疑いは持たなかった。

「此方台湾軍ＭＳ部隊司令長官、船頭　海。部隊名は無い。階級は少将だ、ＢＥＴＡを発見したのでな、応援に駆けつけさせてもらった」

カイがそう言うと、周囲の空気がビシリと固まる。

（……司令？……少将？）

海波は今聞いた事が理解はできたが、受け入れられない。そもそも、何故司令長官が実戦に出ているのかわからないし、しかも護衛の数も余りに少ないように思える。

「ご、ご助力ありがとうございました、つきましては我が統一中華戦線の基地に招待させて頂きたいのですが、いかがでしょうか？」

相手は台湾軍の少将、海波に比べて凄まじい階級差があるが、それでも目の前のＭＳの情報が欲しい。

基地に招待して二、三日滞在して貰えば、少しは情報が得られるだろう。

「いや、此方も残念ながら任務中でな、直ぐにこの場から離れさせてもらわなければならない。
折角のお誘いだが、すまないな」

「はぁ、わかりました。
ご助力ありがとうございました」

誘いを断られて海波は落胆したが、断られるのは薄々わかっていた。

しかし、あの機体を調べられれば中国兵士の命が何千人の命が、助かるかもしれない。

（お母さんも妹も、助かるかもしれない。それなら）

海波にある考えが浮かび、隊員に密かに命令を出そうとする。

カイとの回線が切れると海波は乾いた唇を嘗め、口を開く。

「みんな、あの赤いザク達が後ろを向いたら、一斉に攻撃するぞ。
あの赤いザクを捕獲するんだ」

「何故だ！？」

「……勝てるのか？勝てても、台湾との関係が悪化するぞ？」

「了解」

「確かにあの戦術機に使われている技術がわかれば……」

海波の言葉に部下達は各々反応を見せる。

「あの技術があれば、祖国が救えるかもしれないんだぞ！
迷う事はない、国を……家族を救うにはもう形振り構ってられないのはわかってるだろ！？……三秒後に行くぞ」

海波がそう言っている間に、ゲルググは海波に背中を見せる。

海波もこんな事をやりたい訳じゃないが、自分を逃がす為に死んで言った祖父や、ＢＥＴＡに殺された父親を思うと、罪悪感を感じながらも使命感が勝る。

海波は隊長機として支給された殲滅８型を操縦し、背中を向けるカイのゲルググの背中に発砲した。

「……残念だ、本当に残念だよ」

海波の耳に突然声が聞こえる。

（回線は切った筈なのに、何故カイ少将の声が聞こえるんだ！？）

驚く海波の目の前で、カイのゲルググは銃弾を回避し、海波に向かって進んで来るのが見える。

「君達の愛国心は俺個人としては素晴らしいと思い、この発砲も許してやりたいと思う。
しかし、この技術が漏洩してしまえば、新たな戦いを生む可能性もあるんだ。
すまない」

カイはそう言いながら殲滅８型にゲルググを接近させ、ヒートホークを振るわせる。

海波は咄嗟にスーパーカーボン製の剣でヒートホークを受け止めが、剣は拮抗する事なくヒートホークに切り裂かれる。

「くっ」

海波は咄嗟に殲滅８型を後ろに下がらせると、部下のファントムが一斉にゲルググに向かって射撃を開始する。

「素晴らしいコンビネーションだ、腕前だけなら俺以上かもしれないな」

しかし、弾はゲルググの機動力のせいで数発しか当たらず、しかもその上銃弾は命中したにも関わらず、ゲルググの装甲によって弾かれた。

海波はその間に、カイの部下であるザク達を見るが、ザク達は何故

か動いていない。

「残念だ」

ゲルググに乗るカイの声が海波達の耳にまた聞こえ、見るとゲルググによってファントムの内の一機が溶断されていた。

更にザクがザクマシンガン改をファントムに向かって放ち、ファントムを爆発させていく。

「みんな、すまない」

海波は血を吐くような表情でそう言うと、大破されたファントムからナイフを抜き取り、カイのゲルググに向かって機関銃を連射しながら突撃する。

「うおぉぉぉ！」

海波は叫び、殲滅８型は呼応するように剣を振りかぶる。

殲滅８型はヒートブレードを構えるゲルググと交差する。

一拍間が開き、殲滅８型は斜めにずれると大破した。

（所詮ゲーム、所詮ゲームなんだ）

カイはそう思うと顔色を青くさせながら、ゲルググに武器を収めさ

せる。

彼らの言葉をカイは回線に侵入し、全て聞いていた。

祖国を守りたい、家族を守りたいという言葉に、ゲームの世界だと思っているカイの心は何故か揺れてしまう。

（ＭＳの技術が世界に露見したらどうなるか……全てのガンダムシリーズのように戦争が起こるかもしれない、その可能性はかなり高い）

確かに技術はブラックボックス化している。

しかし、絶対に安全とは言い切れないのだ。

もし、天才的な頭脳を持つ博士でもいるなら、この技術は解明されていく。

そして、その天才がこの世界には確かにいるのだ。

（感傷的になるなんて、俺は以外に繊細だったのかもしれないな）

カイは自嘲ぎみにそう思うと、操縦席から戦術機に向かって手を合わせる。

その後、再度死んでいった部隊員に謝りながら証拠を完璧に隠蔽していく。

そして、カイは一息つき、何処かで少し休息しようかと考え始めた。

その時だった。

「カイ少将、台湾でついにクーデターが発生しました」

代理を任せているアンドロイドから、緊急の連絡が入ったのは。

放浪し刃は赤く染まる（後書き）

閲覧ありがとうございました、この後の展開についてのご意見ですが、完璧に反映できるとは限りません。
しかし、ある程度は要望に答えていきたいな、とも思っています。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1342z/

マブラヴ暴走機械

2011年12月11日23時27分発行